

特集

3

小中接続

—子どもの学びを中学校へつなぐ—

4

対談

小中双方の良い点を取り入れ
「ギャップ」を「ステップ」に変える栃木県宇都宮市立西原小学校 高野恵子 校長
栃木県宇都宮市立一条中学校 久保 徹 校長

10

学校事例1

取り組みの原点を全教師で共有し
「欠落・段差・落差なき教育」へ

愛知県阿久比町立英比小学校、阿久比町教育委員会

16

学校事例2

「きずな」「まなび」で子どもも
教師もつながる「小っ中連携」

鳥取県北栄町立北条小学校



21

学校事例3

小中の教師が共通の視点で
授業を評価するシートを活用

東京都世田谷区立太子堂小学校

連載

1

私を育てたあの時代、あの出会い

厳しくも温かい叱咤激励の全てが新人の私の糧となった

埼玉県さいたま市立高砂小学校 校長◎小山 勝

26

パワーアップ! 授業研究

授業を「みとる」力を高める工夫

高知県高知市立新堀小学校

28

つながる学校と家庭の学び

個人別生活習慣改善で目指す家庭学習の習慣化

岐阜県中津川市立付知南小学校

32

読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

VIEW21編集部一同

厳しくも温かい叱咤激励の全てが 新人の私の糧となった

埼玉県さいたま市立高砂たかさご小学校校長 小山勝 KOYAMA MASARU

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、小山校長が語る。

自ら先輩に声を掛けて
先輩の教えを請うた

初めて赴任した学校での日々は、その後の教師人生を決める中身の濃いものでした。私は一度、大学を中退して別の大学に入り直したため、教師になったのは27歳の時。ストリートで大学を卒業した人たちは既に教職5年目であり、私は少し焦りを感じていました。

当時は初任者研修などなく、私は先輩方が子どもと接している様子を観察して、見よう見まねで授業や課外指導に取り組みました。また、少

しでも成長の糧に出来ればと、この人と思う先輩を見付けては積極的に声を掛けて教えを請いました。当時私と同じ5年生の担任で、学年主任をしていた久保田重治先生はその一人です。

久保田先生は、焦り気味の私に「教師の力量は、物理的な時間の経過とは関係ない」とおっしゃいました。勤務年数が1年だとしても、3年分の力量を付けることは可能であり、逆に3年やってもなかなか指導力を高められない教師もいるというのです。「4年ぐらいの遅れは、すぐに取り返せるよ」と励ましてください



こやま・まさる 専門教科は理科。教諭時代は「理科サークル」や「学級経営研究会」などに積極的に参加し、指導力向上に努めた。さいたま市立下落合小学校校長などを経て、2011年度から現職。

1980 (昭和55)
新採として
浦和市立大里小学校
(現・さいたま市立
浦和大里小学校)
に赴任



大里小学校の先生方と。
左から3番目が久保田先生、
4番目が高山校長、
5番目が小山先生

1991 (平成3)
浦和市教育委員会
指導主事となる

2004 (平成16)
さいたま市立
下落合小学校に
校長として赴任

2007 (平成19)
さいたま市立
教育研究所長に
就任

2010 (平成22)
さいたま市
教育委員会
学校教育部長に就任

2011 (平成23)
さいたま市立
高砂小学校に
校長として赴任

「子どもの変容を促す授業が出来る教師集団をつくりたい」



ました。

また、久保田先生には「小学校の教師でも、これだけは誰にも負けないという専門の教科を究めるべきだ」と言われました。私は大学で理科を専攻していたので、早速、教員が自主的に理科教育を学ぶ「理科サークル」に入り、学習指導案や教材づくりについて勉強しました。

理科の指導技術を磨くことは、他教科の授業づくりにも役立ちました。理科の授業を通して、子どもが

どんな場面で気付きを得たりつまじいたりするかなど、子どもの理解を深める上でも役立ったのです。

やっと校長先生に褒められる授業が出来た

初任校には、新人の私を厳しく、かつ温かい目で見守ってくれた先生がもう一人いました。高山昭次郎校長です。

高山校長にはよく叱られたものです。私の授業を教室の後ろで見学

し、「この45分でどんな力を子どもに身に付けさせたいのか」という目的が曖昧だった時や、子どもの言動に引っぱられすぎた時など、「小山の指導の仕方は甘い！」と厳しく言われました。高山校長が私への奮起を意図してそうした発言をされたのかは分かりませんが、頭ごなしに言われると「なにくそ」と思うものです。「いつかは校長を見返したい」という思いが、教師としての力量を高める原動力となりました。

高山校長には、子どもの可能性を引き出す大切さも学びました。市のスポーツ大会の時のことです。私は「子どもが一生懸命練習することが大事で、結果は二の次」と考えていました。しかし、高山校長は「努力を成果として子どもに返すことは教師の務め」とおっしゃったのです。「頑張ったから優勝できた」「自分もやれば出来る」という達成感を与え、自信につなげるとの考えでした。

その後、高山校長と私は別々の学校に異動しましたが、ある時、高山校長に授業を見ていただける機会が訪れました。研究発表会に先生が来てくださったのです。教科はもちろん理科です。

研究発表で取り組んだのは、学習指導要領改訂によって新たに加わった「人の誕生」という5年生の単元です。私は子どもに、自分の命が生まれたことの不思議さに目を向けさせ、理科への興味に結び付けたいと考えながら授業をしました。ずっと見ていた高山校長は、授業が終わった後、一言、私にこう言ってくれました。

「とても感動的な授業でした」
褒められたのは初めてでした。叱られっぱなしだった私は、やっと先生から認めてもらえる授業が出来るようになったのです。

私が一人前の授業を出来るようになったのは、新人時代に周りの先生から励まされ、時に叱られ、助言をいただいたからです。管理職として若手の先生を指導する立場になった今、彼らに言うのは「授業力を磨きなさい」ということです。学習の主体は子どもですが、授業の主体は教師です。教師が授業研究を重ねることで授業力が高まれば、子どもの変容を促す授業が可能となります。指導計画づくりや教材研究などに熱心に取り組む教師集団を、これからもつくっていききたいと思えます。

特集

小中接続

—子どもの学びを中学校へつなぐ

小学校から中学校への進学時に、不登校の割合はぐっと増える。
大きな要因を、学習内容でのつまずき、教師の指導方法の違いと考えれば、
小学校の指導も、「接続」という視点で見直すことが必要ではないだろうか。
今号では、子どもの学びをつなげるために、
小学校では何をすべきかを考えたい。

小中接続 実践のヒント

学校事例①～③ ▶ p. 10～25

「9年間で子どもを育てたい」。
小・中学校の教師がこの思いを共有し
接続の円滑化に取り組む事例を紹介

円滑な小中接続は なぜ必要か

対談 ▶ p. 4～9

「子どもが乗り越えられるステップにするためには
小中接続を強めることが欠かせない」。
共に一貫教育を進める
小・中学校の校長が語る

小中双方の良い点を取り入れ 「ギャップ」を「ステップ」に変える

2010年度から小中一貫教育を進めている宇都宮市立西原小学校と宇都宮市立一条中学校。

取り組みを通じて双方の学校の様子を見る中で、小学校と中学校の間に存在していた大きなギャップに気づき、小さなステップに変えていく必要性を感じたという。

●小中の円滑な接続が必要な理由

学習面のつまづきを

小中の教師で共有したい

——宇都宮市では、市全体で小中一貫教育に取り組んでいるとうかがいました。どのような内容なのでしょうか。

久保 宇都宮市では、2012年度から全ての公立小・中学校を25の「地域学校園」に分け、各学校園で小中一貫教育を進めます。私たちの一条地域学校園（宇都宮市立一条中学校、宇都宮市立西原小学校、他2校の小学校）は、モデル学校園として10年度に先行して取り組みを始めました。高野校長とは、この2年間、一緒に取り組みを進めてきました。

高野

本校は05年度から3年間、文部科学省から学力向上拠点形成事業研究校の指定を受け、その一環として一条中学校との連携に取り組みました。連携の目的は、学力の向上と教師相互の理解を通して、中一ギャップを軽減し、小中の円滑な接続を目指すことでした。特に、国語と算数の指導内容では、小中に共通した課題について重点化を図るために、年間計画に位置付けたり、教師の授業交流を行ったりしてきました。これらの蓄積を基に、10年度から本格的に一貫教育に取り組み始めました。

——読者の先生方は、小中接続の難しさを感じているようです（図1）。貴学校園では小学校と中学校の接続において、どのような課

図1 小中接続における難しさ

- 「授業を見る」だけで、小学校も中学校も変わろうとしない。交流のビジョンが不明確
- 授業を見合うためには、互いの学校の距離や時程表などが気になる。日程調整だけでも難しい
- 小中どちらも、教師が接続の必要性に迫られていないことが、一番の問題点
- 最も必要なことは、教師の意識の高まり。危機感や必要性を感じない教師が何度交流をしても、深まりはない
- 形式的な交流を図ることなら、さほど難しいことではない。しかし、内容面で見ると、これでよいのかと思うことが多々ある

題があつたのでしようか。円滑な接続が必要だと思つた背景をお話ください。

久保 子どもが成長していく上で、ある程度のギャップは必要だと思えます。しかし、これまででは、小学校を卒業した子どもにとって、学習面でも生活面でも小学校と中学校の間の段差が大きすぎたのではないでしようか。子どもが少し頑張れば乗り越えられるようなステップにしなければならぬと感じていました。

高野 小・中学校の教師が授業交流をする上では、日程の調整が難しく、具体的な内容などを話し合う時間の確保、段差が大きく子どもがつまづきやすい学習内容の指導のあり方まで踏み込んだ話し合いが十分に出来ていな

小中接続——子どもの学びを中学校へつなく

栃木県宇都宮市立西原小学校

高野恵子 校長

たかの・けいこ◎宇都宮市立小学校教諭、宇都宮大への内地留学、算数教科指導員などを経て、現職。
宇都宮市立西原小学校◎「心豊かでたくましく、みんなですべてみんなで育つ地域の学校づくり」を学校経営理念とし、地域と一体となった教育を目指す。児童数は291人。



栃木県宇都宮市立一条中学校

久保徹 校長

くぼ・とある◎宇都宮市立中学校教諭、宇都宮市教育委員会指導主事、宇都宮市教育センター所長などを経て、現職。
宇都宮市立一条中学校◎「楽しい学校づくり」のための1要素として学力向上を重視し、「授業に真剣に取り組もう」の5項目に徹底して取り組む。生徒数は424人。

かったことが挙げられると思います。子どもが苦手意識を持ちやすい学習内容については、スモールステップで徐々に理解できるように過程や工夫があるとよいと感じます。

久保 小学校で、ある部分につまずいたまま中学校に進学してくる場合も、学びを積み重ねていくことが難しくなってしまう。

高野 その通りだと思います。算数の例ですが、小学校では5年生から内容が難しくなり、「単位量あたりの大きさ」「比例・反比例」などでつまずく子どもがよく見られます。そのままの状態で中学1年生になると、小学校でのつまずきを負の数や文字式が出てくることへの戸惑いも加わり、一次関数への苦手意識が強くなる生徒が多いと感じました。子どもが中学校入学後につまずきやすい部分は、小学校時代に重点的に身に付けさせておきたい、そのためには、子どもがどこでつまずくのかを、小・中学校の教師が一緒に洗い出し、共有したいと考えるようになりました。

久保 同感です。これまでは、小・中学校の教師が互いの学習内容や子どもの様子を、十分に理解しているとは言い難い状況でした。

この課題へのアプローチとして、私たちの学校園では、中学校の教師が3校の小学校で指導する乗り入れ授業を、国語、算数、外国語活動でそれぞれ年2回ずつ実施し、一方、小学校の教師はT2として中学校の授業に参加しています。また、互いの授業研究会に参

加し、意見し合うことも始めました。小学校の先生は、中学校の先生とは異なる視点で授業を見て意見を言ってくださるので、いろいろな発見があります。各教科において小・中学校の教師が学びのつながりを理解することで、つまずきへの手立てを共に考えるなど、スムーズな接続が可能になっていくと考えています。

高野 これまでも、中学校でのつまずきを少なくするために、限られた授業時間の中で指導を重点化したり、授業で学んだことを日常的に活用する機会を増やしたりすることは必要だと考えてきました。しかし、小学校で完結している意識や、中学校での学習の土台となる指導の重点が抜けてしまっていた部分があり、どこかにあったかもしれない、と反省しました。中学校の学習とのつながりをもっと考える必要性を感じました。

久保 小学校と同じような学習を中学校で繰り返すことがなく、その上に学びを積み上げられるように、中学校が小学校での指導内容を知っておくことも大切です。例えば、英語のゲーム活動などは小学校でたくさん行っているのに、中学校ではそれを踏まえた活動を取り入れられるようにすることが必要です。

小中で共通化できる部分を積極的に取り入れる

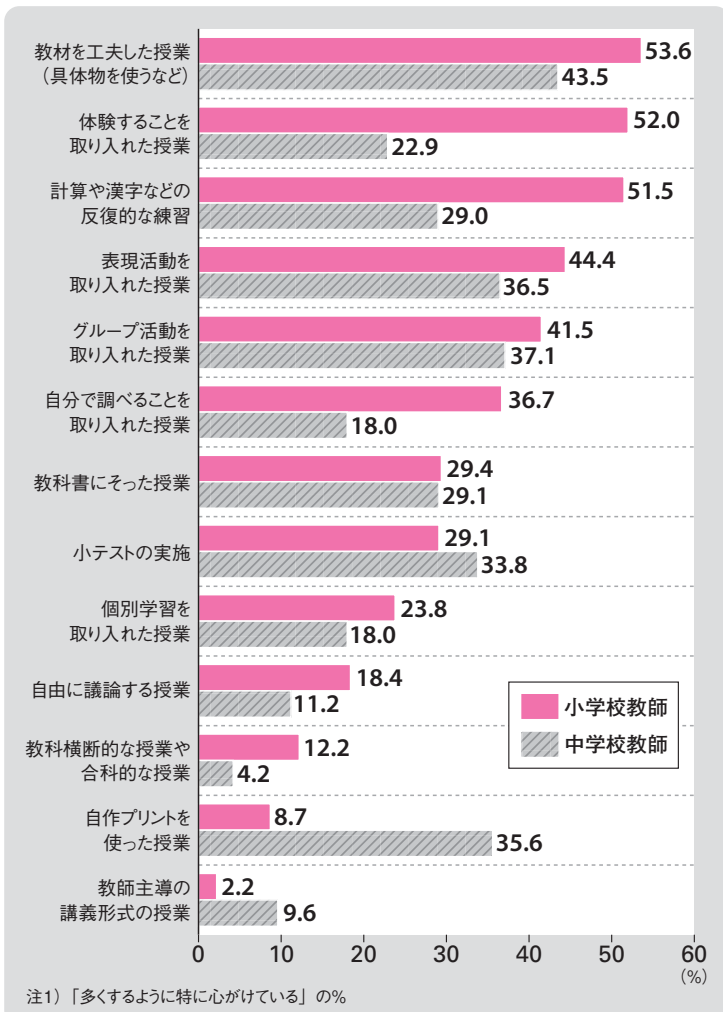
高野 小・中学校では、学習方法、特に授

業の進め方も大きく違うと感じます(図2)。中学校の授業を参観して、生徒が静かに先生の話を聞いて黙々と学習している様子や、先生方が1時間の授業内容をきっちり指導していることに、小中の文化の違いを見た思いがしました。ただ、「小学校であれだけコミュニケーションを取れるように育ててきたので、中学校であればもっと積極的な討論があってもよいのではないか」と感じたこともあります。

久保 小学校の授業を見ると、子どもがきちんと挙手や返事をしたり、「○○です。その理由は○○です」などと上手に説明したりする姿に驚かされます。中学校の授業は教師が主導する場面が多く、発達段階からも、中学生に活発に発言させることはなかなか難しいものがあります。中学校の教師が小学校の良さを理解し、その良いところを取り入れた授業をすることが必要でしょう。

高野 小学校は1年生を基準にどう育てるかを考えるのに対し、中学校は3年生での高校受験を目標として子どもの姿を考えることが多いように思います。そう考えると、小・中学校で指導が異なる部分があるのは当然だと思います。ただ、学習や生活の面で共通のルールのようなものをつくったり、小学校高学年では少しずつ子どもの自主性に任せる指導を取り入れたりすれば、何もかもが新しいことにはならず、子どもの不安を軽減できるので

図2 小・中学校の教師がそれぞれ心がけている指導



久保 学習環境についても、小学校から学ぶことがたくさんあります。中学校は小学校に比べるとどうしても殺風景になりがちですが、小学校の掲示物の充実ぶりを見て、多くの先生が掲示に工夫をするようになりました。教科担任制や定期考査、教師の子どもに対する姿勢など、中学生になると変わること

はありますが、共通化できる部分、どちらにも取り入れると良い部分は、積極的に取り入れることが大切だと思います。これを学校園全体で共通理解の下に進めていけば、複数の

小学校から中学校に進学してくる場合でもスムーズに指導を始められます。

高野 子どもの不安を軽減するためにも、中接続を円滑にすることは必要です。以前は、中学校に対する小学生の不安は大きく、「勉強が難しくなるのでは」「先輩が怖いのでは」「部活動は厳しいのでは」といった声がよく聞かれました。これは当たり前前で、大人でも経験したことのない世界に入っていく時には、強い不安を感じるものです。しかし、中学校の内実がよく分かれば、不安は「期待」に変わります。

出典 / Benesse 教育研究開発センター「第5回 学習指導基本調査報告書 小学校・中学校版」(2011) 調査時期は2010年8~9月、調査対象は、小学校教師2,688人、中学校教師2,827人

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

久保 私たちの学校園で、小学生が中学生に親しむ上で効果を発揮しているのは、「あいさつ運動」です。これは、毎月1回、通学時に中学校の教師や生徒が小学校の校門に立ってあいさつをする活動です。乗り入れ授業で中学校の教師が小学校を訪問する活動もそうですが、実際に中学校の教師や生徒に会い、人間関係が出来ることで、子どもは慣れ、中学校への不安が和らぎます。

高野 6年生の中学校訪問も効果的です。中学校の文化祭や合唱コンクールを見学し、中学生の素晴らしい歌声などを目の当たりにしたことで、中学生への憧れが非常に強まりました。

●小中接続の土台をつくるために

**言いたかった意見や疑問を
校長が伝え合うことから始める**

現在は、さまざまな取り組みをされていますが、小中一貫教育の必要性は、最初から先生方に浸透していたのでしょうか。

高野 必ずしも初めから積極的に取り組んでいたとは言えない部分もありました。しかし、小中の交流を通じて、互いの様子が見えるようになったり、子どもにとつての効果が見えるようになったりしたことで、多くの先生方が主体的にかかわるようになってきたと感じています。

久保 当初は、小学校と中学校とでそれぞれ

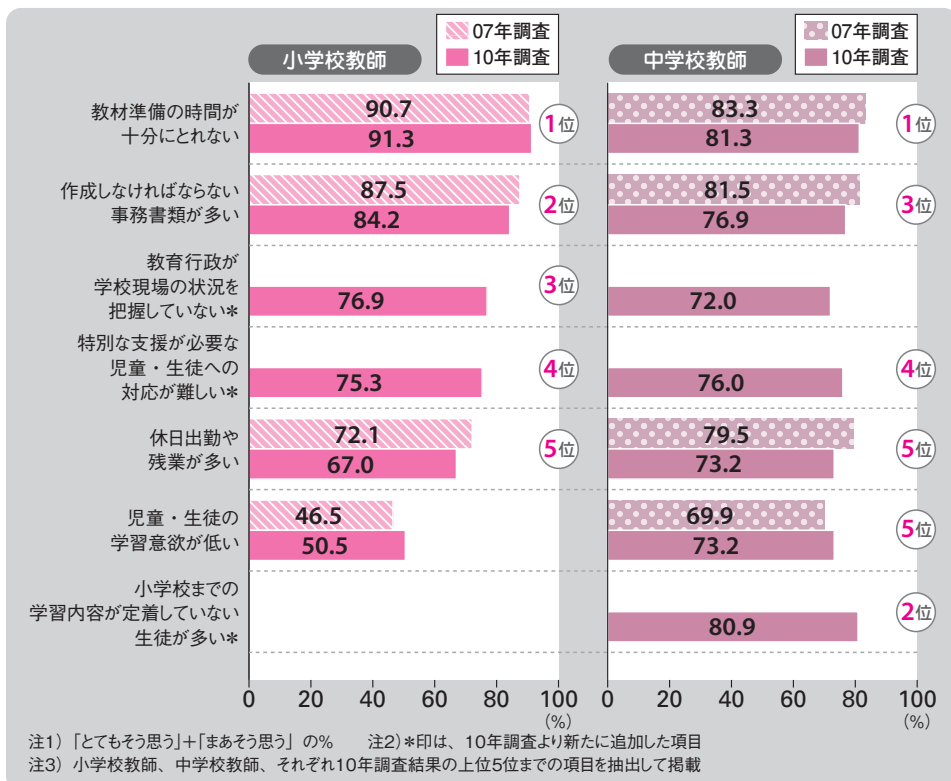
の主張がありました。しかし、互いに言いたかったこと、疑問に思っていたことを、まずは校長同士が伝え合うことから始めました。小中の先生方が一枚岩になれるかどうか、同じ土壌に立てるかどうかが何より大切です。1年目は大変なこともありましたが、2年くらいは基盤づくりの期間として捉える必要があると思います。

高野 組織としては、「学習」「生活」「健康・体力」「交流連携」の4つの部会を設けています。学校の取り組みの初年度は、年間行事に小中一貫の予定を組み込んでいかなかったため、会議や研修の日程を合わせるのに苦労しました。そこで、11年度は年間行事に月1回の「小中一貫の日」を組み込みました。この日

を中心として、全体会を実施したり、地域の4校を輪番で会場として各部会で話し合いを進めたりしています。4校の先生方が無理なく顔を合わせられる機会をつくることは、先生方の意識を高めるために重要だと思っています。

久保 小中合同の懇親会を開いたことでも、

図3 小・中学校教師のそれぞれの悩み



出典／Benesse 教育研究開発センター「第5回 学習指導基本調査報告書 小学校・中学校版」(2011)
調査時期は2010年8～9月、調査対象は、小学校教師2,688人、中学校教師2,827人



人間関係が深まりました。先生同士が仲良くなり、言いたいことや思ったことを言えるようになれば、双方の良い所も見え、互いに取り入れることが出来ると思います。学校段階が異なっても教師として共通する悩みはあるものです（P.7 図3）。子どもを育てるという共通目標の下、協力できる関係が築ければよいと考えています。

高野 小学校では不登校でなかった子どもが、中学校で不登校になる場合があります。

以前は、そのような情報が小学校には届かず、子どもが休み始めて随分経ってから、その事実を知ることがありました。「休み始めた後にすぐ連絡をくれれば、小学校から子どもにも働き掛けるなど何か出来たかもしれない」と感じたことがあります。

久保 中学校としては、「子どものちょっとしたつまづきを伝えてもらいたい」と、小学校に対して感じていたことがあります。一般的に不登校は中学校1年生で多いといわれますが、小学校の時に全くつまづきのなかった子どもが、中学生になって突然不登校になるケースはほとんどありません。不登校が起るのは、小学校時代に友人関係や家庭環境など、何らかの課題を抱えていた子どもが多いのです。ちょっとしたつまづきでも小学校からあらかじめ伝えてもらえると、中学校でもその点に気を付けて指導できると思います。

高野 このように、「なぜかな」「もっとこうしてくれればよいのに」と思うことを伝え合う中で、子どもがよい形で育っていくためには、情報共有がとても大切なことを改めて感じるようになりました。子どもの情報共有は、小学校の学年間で担任が変わるだけでも引き継がれないこともあるくらい、簡単なようでも難しいことでもあります。現在本校では、一人ひとりの子どもの情報が確実に引き継がれていくように、「児童指導ファイル」を作る試みを始められています。

● 成果と今後に向けて

卒業後の子どもの成長を知り 中学校とのつながりが深まる

—これまでの取り組みから見えてきた成果や課題は何でしょうか。

高野 子どもの中学校に対する不安が軽くなり、期待や憧れが膨らんできたことが一番の成果でしょう。「中学校ではこんな勉強をしたい」「この部活動に入る」など、前向きな言葉がよく聞かれるようになりました。

久保 本校では、病気や障がい、家庭に起因するものを除き、1年生の不登校が減りました。先生方が小学生の実態、中学校入学時の生徒の能力や状況への理解を深めたことが、小中の差を小さくすることにつながったのでしよう。乗り入れ授業により、小学生にとって「知っている先生が中学校にいる」状況が生まれたことも、中学校生活への溶け込みやすさにつながっているのかもしれませんが。

高野 教師の意識の変化も大きな成果です。アンケートでは、8割以上の先生方が「小中一貫教育の取り組みに効果を感じる」と回答しています。小学校では中学校とのつながりの中で授業を考えられるようになりました。これまでは中学校に送り出すという意識だったのが、中学校を訪れる機会が増え、卒業後の子どもの成長も見られるようになったからだと思います。

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

久保 人と人とのつながりができ、会議などでもより早く1つにまとまるようになってきました。そうになると、一層やる気が出てきますし、互いの良い所に目が向きやすくなりま
す。この良いサイクルを続けたいと思います。

**9年間の子どもを共有し
取り組みを進めていきたい**

久保 今後は、小中9年間のカリキュラムの作成を計画しています。育てたい子ども像や各教科のつながりを見直し、9年間を通した学びを考えたいと思います。そうすれば、子どもの学びや学びへの意欲が小学校、中学校、その先へもつながると思うのです(図4)。

高野 小学校では3教科で乗り入れ授業をしてもらっていますが、これを全教科に広げられれば、相互理解がより深まるのではないかと思います。小学校では1人の担任が全教科を受け持ちますが、実験の準備の大変さなどから理科の指導を不得意とする教師もいます。以前、中学校の理科の先生に授業をしていただいた時には、子どもは先生の話に興味津々で、中学校への期待も高まったようでした。あるいは算数で、9年間のカリキュラムを基に比例・反比例など、つまずきやすい単元の指導を中学校の先生にしていただければ、子どもの理解が深まるのではないかと期待しています。このように考えると、乗り入れ授業の時期や内容の必然性が高まります。

小学校の教師は、中学校3年間の学習内容を頭に入れた上で指導することが理想です。決して簡単なことではありませんが、9年後の子どもたちがどのような姿になっているかを全員が共有して、取り組みを進めたいと考えています。

久保 中学校での乗り入れ授業では、現在は小学校の先生にT2として入ってもらっていますが、それだけではもったいないと感じています。例えば、小学校から中学校になって急に難しく感じる単元でスモールステップになるような授業をしていただけると、効果的ではないでしょうか。

思い返すと、このような具体的な課題や展望は、1年前にはまだ浮き彫りにはなっていないかもしれません。小学校と中学校がねらいを共有しながら取り組みを進め

小学校の教師は、中学校3年間の学習内容を頭に入れた上で指導することが理想です。決して簡単なことではありませんが、9年後の子どもたちがどのような姿になっているかを全員が共有して、取り組みを進めたいと考えています。

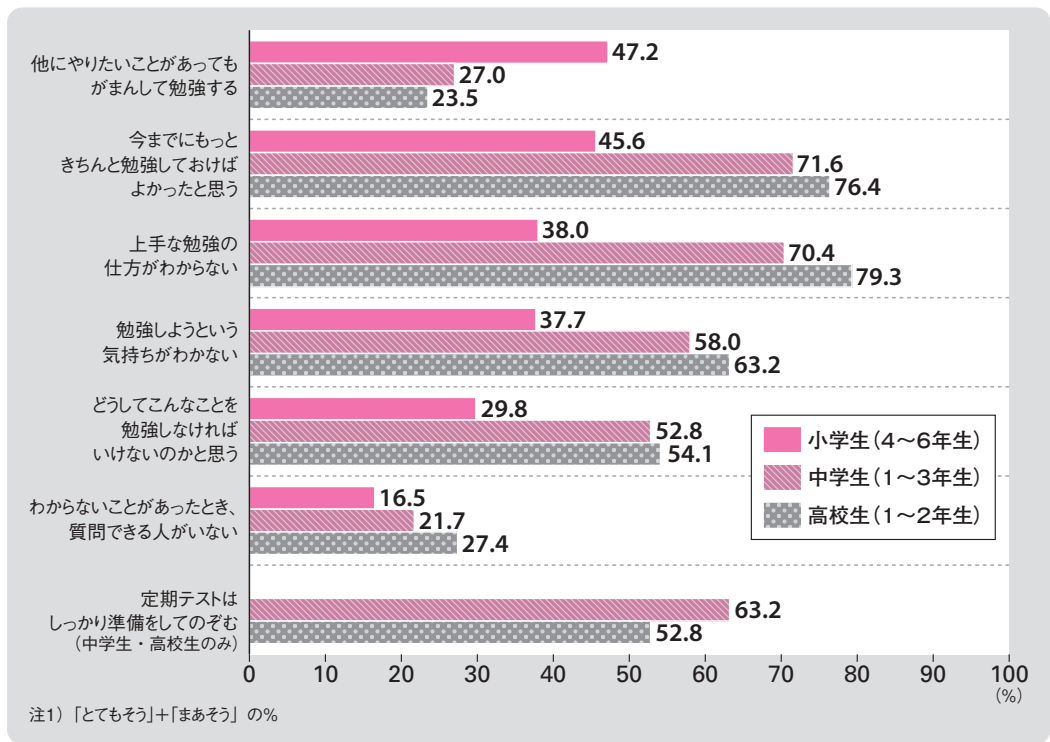
久保 中学校での乗り入れ授業では、現在は小学校の先生にT2として入ってもらっていますが、それだけではもったいないと感じています。例えば、小学校から中学校になって急に難しく感じる単元でスモールステップになるような授業をしていただけると、効果的ではないでしょうか。

思い返すと、このような具体的な課題や展望は、1年前にはなっていないかもしれません。小学校と中学校がねらいを共有しながら取り組みを進め

の中で見えてきて、互いに更なるアイデアを出し合えるようになったことをうれしく思っています。これからも小・中学校の先生が同じ方向を見て進んでいきたいと思っています。

——本日はどうもありがとうございました。

図4 子どもの勉強への取り組み(学校段階別)



出典／Benesse 教育研究開発センター「第2回 子ども生活実態基本調査」
調査時期は2009年8~10月、調査対象は小学生3,561人、中学生3,917人、高校生6,319人

取り組みの原点を全教師で共有し 「欠落・段差・落差なき教育」へ

愛知県 阿久比町立英比小学校、阿久比町教育委員会

中学校で表面化する問題は、中学校だけの責任ではない。そうした認識の下、阿久比町の小学校4校と町内唯一の中学校は、互いのつながりを深めている。小中の教師同士、子ども同士の交流が増え、中学1年生での不登校が激減するという成果も表れてきた。

取り組みのポイント

- ◎阿久比町には小学校4校と中学校1校の計5校があり、町内の9割以上の子どもが同町立阿久比中学校に進学する。各小学校の児童数は約200~500人。阿久比中学校の生徒数は約750人
- ◎2005年度に町の独自施策として「幼保小中一貫教育プロジェクト」を立ち上げ、改善を重ねながら継続している
- ◎各学年で必要な学習内容を確実に身に付けさせる「欠落なき教育」、幼保小中の「段差なき教育」、学校間・学級間の「落差なき教育」を掲げ、教育長や校長らのリーダーシップの下、全ての教師が小中接続への意識を高めることを目指している

愛知県知多郡阿久比町

■知多半島の中央部に位置する人口約2万6,000人の自治体。「幼保小中一貫教育」を推進し、教師の力量向上と町を挙げて子どもを育てる「阿久比学園」の創造を目指す。

阿久比町教育委員会

所在地 〒470-2292
愛知県知多郡阿久比町大字卯坂字殿越 50
TEL 0569-48-1111(代)

■事務局の指導主事1人で小学校4校、中学校1校を担当

S c h o o l D a t a

◎1909(明治42)年開校。校訓は「正しく・強く・おおらかに」。2011年度は「阿久比町幼保小中一貫教育プロジェクト」の事務局を務め、13年度の研究発表に向けて準備を進めている。



校長 石井勝巳先生

児童数 499人 学級数 18学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒470-2212 愛知県知多郡阿久比町大字卯坂字北大平7

TEL 0569-48-0022

URL <http://www.eibi-e.aichi-c.ed.jp/>

公開研究会 未定

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

◎背景

中学生になって表面化する問題を解決するために

阿久比町は、知多半島の中央部に位置する、豊かな自然が残る地域だ。古くから住む三世代の家庭も多いが、名古屋市内から電車で30分程度と交通の便が良いことから、近年は宅地開発が進んでいる。町に小学校は4校あり、私立中学校に進学する一部の子どもを除き、町内の小学校を卒業した子どもはほとんどが、町内唯一の阿久比中学校に進学する。

落ち着いた子どもが多い同校の地域でも、「中学校になって表面化する問題」があった。その1つは不登校だ。小学校では1校に1人いるかないかの不登校の子どもが、中学校では20人程度に上っていた。特に、中学1年生の2学期は不登校が増える時期であり、原因の1つに小学校と中学校での指導の隔たりが考えられたと、阿久比町立英比小学校の石井勝巳校長は話す。

「小学校の学級担任制では、授業でも学級活動でも同じ教師が子どもとかかわるため、子ども一人ひとりを把握して細やかに支援できます。しかし、教科担任制の中学校では教師との距離が離れ、指導の仕方も変わります」学習のつまずきも要因の1つに考えられた。小学校時代に学習内容や学習習慣が定着していないまま中学校に進学する子どもが、

残念ながら一定数見られたのだ。中学校では学習内容が難しくなることに加えて部活動が始まるため、学習習慣のない子どもはますます机から遠ざかり、授業に付いていけなくなりつまずいてしまう悪循環が生じていた。

このような課題を解決するために、阿久比町教育委員会（以下、町教委）は2005年度から「幼保小中一貫教育プロジェクト（以下、プロジェクト）」を進めてきた。町教委の瀧塚崇指導主事は、次のように説明する。

「小学校と中学校の両方のご経験がある、当時から教育長が『中学校で表面化する問題は中学校だけの責任ではなく、保育園、幼稚園、小学校、また家庭の責任でもある』と考えたのです。年齢に応じて身に付けるべきことを確実に身に付ける『欠落なき教育』、各学校段階で教える内容と発達段階とのずれがない『段差なき教育』、同じ学校段階間や学級間で差のない『落差なき教育』を目指す教育として掲げられました」

同じく、小中両方の指導経験のある石井校長も次のように話す。

「私は小学校と中学校を経験し、大きな違いを感じていました。小学5・6年生は小学校では修了に向かう時期ですが、同時に中学校への準備期間でもあります。阿久比町に赴任し、教育長の考えをうかがう中で、『中学校へのアプローチプログラム』が必要だと、より強く感じるようになりました」



阿久比町立英比小学校校長
石井勝巳 [Shigeo Iwase]
「教室は間違えところ。失敗を恐れず発言し、互いに学び支え合う学校をつくりたい」



阿久比町教育委員会
学校教育課指導主事
瀧塚 崇 [Takizuka Takashi]
「先生方とのコミュニケーションを大切にして一緒に学校をつくっていききたい」

◎取り組み内容

9年間の「重点指導事項」を作りつまずきへの手立てを考えたい

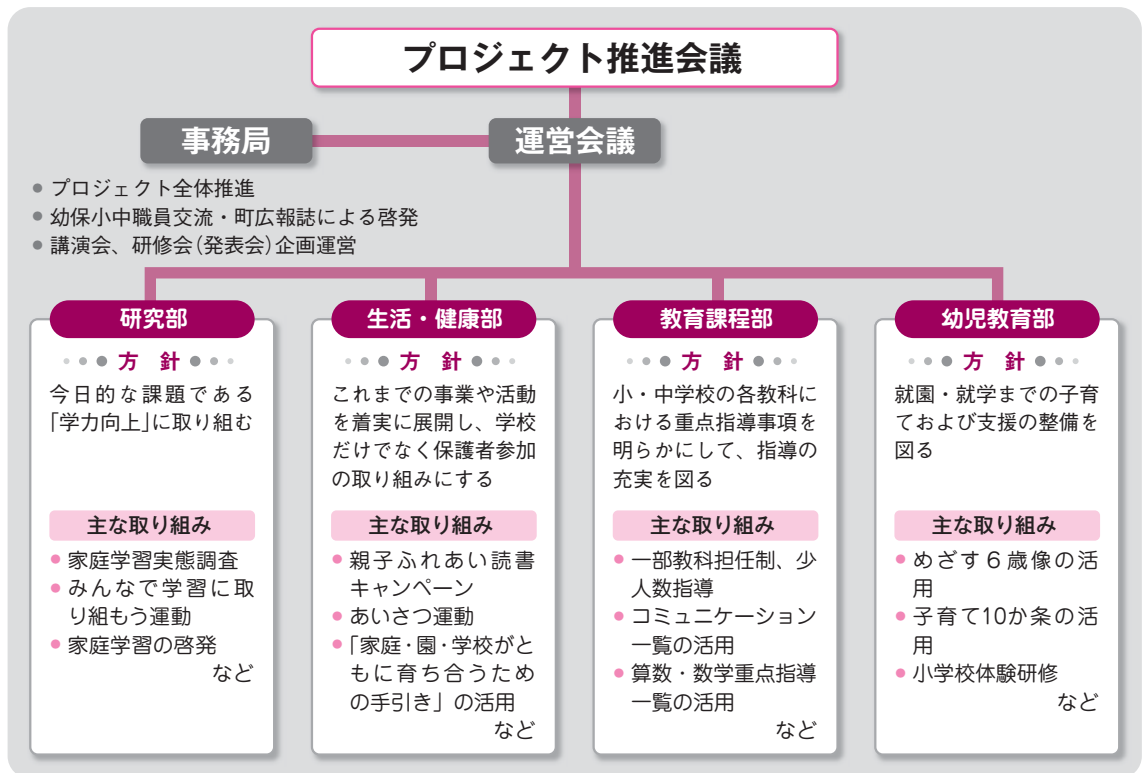
現在、プロジェクトは、町内の全ての学校・教師がかかわり、「研究」「生活・健康」「教育課程」「幼児教育」の4つの部会で進められている（P.12図1）。小・中学校全5校のうち、4校に4つの部会の担当を振り分け、残りの1校が事務局を担う。かつては5つの部会があり、事務局と部会を兼務する学校があったが、負担が大きくなり、現在の形となった。プロジェクトは7年目となるが、研究体制や研究内容は試行錯誤を繰り返してきた。代表的な施策を紹介する。

◎小学校での一部教科担任制

子どもが中学校で感じる戸惑いを減らすため、一部の教科で教科担任制を取り入れた。「担任が学級の子どもとかかわりを深める

図1

「幼保小中一貫教育プロジェクト」の組織と主な取り組み



*同校の資料を基に編集部で作成

ことはもちろん大切です。ただ、複数の視点で子どもを見ることはより深い児童理解にもつながります。一部教科担任制の導入は、小

を担わせざるを得ない場合があったことだ。「教頭や教務主任の先生が、専科として入る形が出来ればよいのですが、それぞれの業

中の接続を円滑にするだけではなく、子どもが学級担任以外の教師と人間関係を築ける利点もあります」

(滝塚指導主事)

英比小学校の場合、6年生は3学級だったため、3教科については、1人の教師が3学級の授業を受け持つという教科担任制を取り入れた。しかし、この方法には2つの問題があった。1つは、教科担任制のための時間割の組み替えに手間が掛かってしまうこと。もう1つは、教師3人の得意教科が分散するとは限らず、不得意な教科

務も多く、難しい面があります。教師の加配などの手立てがないと継続は困難だと感じています」(石井校長)

◎小中9年間の重点指導事項の作成

現在、注力しているのは、小中9年間にわたる「重点指導事項」の作成だ(図2)。

「小中9年間で最低限押さえるべき内容を、教科ごとに一覧表に出来たらと考えています。学習指導要領でも指導内容の系統性は示されていますが、各学年で身に付けるべき内容をより端的に一覧できる資料があればよいと考えました。今後は表の中でつまずきやすい事項に印を付け、小中の教師全員で共有し、つまずきを減らすための手立てを考えられるように活用できたらと思います」(石井校長)

国語と算数の「重点指導事項」に続き、ゆくゆくは他教科の一覧も作成する予定だ。

「特に中学校では、担当教科に関する取り組みの有無が先生方の関心を大きく左右します。子どもの学びをつなぐためにも、先生方の意識を高めるためにも、全教科分を作るのが大切だと考えています」(石井校長)

これまで、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)では、4つの小学校が実践する統一単元の設定を進めてきた。この取り組みが他教科へ広がるヒントになると考えている。

「総合学習の内容には各小学校の特色がありました。小学生として身に付けておくべき知識・技能を洗い出して統一すべき点を探

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

図2 算数・数学 重点指導事項（小学校の「数と計算」領域、中学校の「数と式」領域から抜粋）

小1	<ul style="list-style-type: none"> 10の分解と10の補数関係 (1桁の数)+(1桁の数)で、繰り上がりのある計算 (10何)-(1桁の数)で、繰り下がりのある計算 簡単な2位数・3位数の加減の計算 	中1	<ul style="list-style-type: none"> 正の数・負の数の加法、減法 正の数・負の数の乗法、除法 指数を含む計算 分配法則を使った計算 数量を文字で表す 文字式の表し方 式の値を求める 文字式の加法、減法 文字式と数の乗法、除法 解が整数で、かっこや分数のない方程式の計算 代金などの簡単な方程式の利用
小2	<ul style="list-style-type: none"> 10,000までの数 九九 (2桁の数)±(1桁の数)の暗算 (2桁の数)±(2桁の数)の筆算 簡単な3位数の加減の計算 簡単な分数の計算 	中2	<ul style="list-style-type: none"> 同類項をまとめる 式を足すこと、式を引くこと かっこのついた式の計算 式の値を求める 係数が整数の単項式の乗法、除法 等式の変形 解が整数で、かっこや分数のない連立方程式の計算 代金などの簡単な連立方程式の利用
小3	<ul style="list-style-type: none"> 千万の位までの数 九九を1回適用した除法と、あまりのある除法 (2桁の数)±(2桁の数)の暗算 (3桁の数)±(3桁の数)の筆算 10倍、10でわることによる位の移動と、その処理 分数を数直線上に表し、大小の比較 	中3	<ul style="list-style-type: none"> 分配法則を用いた展開 同類項をまとめる 乗法公式を用いた展開 素数の意味と素因数分解 共通因数を取り出す形の因数分解 和と差の積の形の因数分解 足して○、かけて△の形の因数分解 連続した2数、3数の表し方と奇数・偶数の表し方 平方根の意味とその表し方 $\sqrt{\quad}$の変形 平方根の四則計算 分母の有理化 二次方程式「$x^2=\square$」の解の求め方 $(x-\square)(x-\triangle)=0$の解の求め方
小4	<ul style="list-style-type: none"> 億、兆の位の数 整数の四則計算の定義の理解と活用 小数の計算（小数の乗除、小数×整数、小数÷整数） 分数の計算（同分母分数・真分数・仮分数の加減） 		
小5	<ul style="list-style-type: none"> 整数の性質（約数、倍数、素数） 小数の計算（$\frac{1}{10}$、$\frac{1}{100}$の位の乗除） 分数の計算（異分母分数・真分数・仮分数の加減） 分数の乗除（分数×整数、分数÷整数） 		
小6	<ul style="list-style-type: none"> 分数の約分、通分 分数の乗除（分数×分数、分数÷分数） 小数、分数の四則計算の定義の理解と活用 		

*同校の資料を基に編集部で作成

り、15時間程度の統一単元をつくり上げました。中学校に進学しても、皆、同じ単元を経験していることで、共通の素地が持てるような形にしたいと考えました」（瀧塚指導主事）

◎**小学校と中学校の授業交流**

小学校教師が中学校で、中学校教師が小学校で授業をする試みも定期的に行う。ただ、小学校教師が中学校で授業をすることに少し尻込みをする傾向や、中学校教師が小学校で授業をする際は無意識に「小学校仕様」にしてしまい、本来の中学校の雰囲気は薄れてしまう傾向が課題として見えてきた。

「小学生にとっては、中学校の教師に親しみを感じやすくなる良さはありますが、中学校の体験授業の場になりきれないという課題もあります。より良いバランスを探りたいと思います」（瀧塚指導主事）

◎**小学校卒業時の「確認テスト」**

小学校卒業時には、小学校での学習の総決算として「確認テスト」を行う。出題教科は国語と算数で、10年度は中学校の教師がテストを作成した。「確認テスト」のレベルや設問内容については、今後、小学校と中学校とで更に質を高めていきたいと考えている。

◎**小学生の中学校見学**

小学校と中学校の指導のつながりをつくると共に、子ども自身も中学校をより身近に感じられるよう、小学生が中学生と接する機会を増やした。例えば、4つの小学校の6年生

全員に、中学校の文化祭を見学するように促している。また、小学生が中学校の部活動に体験参加する機会を設けたこともある。

●工夫

小・中学校の教師同士が日常的につながる機会を設ける

取り組みを進める上では、教師全員が取り組みの意義を理解し、納得することが不可欠だと、石井校長は話す。

「子どもにとって良いことだ」と実感を持たなければ、先生方には徒労感のみが残ります。教師の入れ替わりもあるため、本校では毎年、年度当初に校長、教頭、教務、校務の四役研修会を行い、プロジェクトの意義や内容を説明しています。それだけでは十分ではないので、プロジェクトの中で子どもの変容を見ながら理解を深めていくのが現状です」町教委でも、着任研修の機会に一貫教育の取り組みを伝えている。

「『一部の教師だけが取り組むこと』『研究主任がすればよい』という意識では、取り組みは根付きません。日々、子どもと接する担任の先生にこそ小中接続の重要性を理解してほしいのです。誰もが日々の授業づくりで手一杯ですから、『今さら何を加えるのか』と受け取られかねません。先生方に何度も訴えなければなりません」（瀧塚指導主事）

同町の教師の多くは小中どちらかの赴任経

験のみで、小学校教師は中学校教師が直面している課題を実感しにくいのが現実だ。そこで、小中の垣根なく教師同士のつながりを深めるきっかけづくりを大切にしている。

代表的な取り組みは、「若い衆研修会」だ。これは教職歴2～5年の若手教師を対象に小中の教師が集まる勉強会で、月1回、第3木曜日の夕方の勤務時間外に、町教委が支援し、開催している。瀧塚指導主事が他の自治体の先進校を訪問し撮影した授業のビデオを見て検討したり、中学校の体育教師にマット運動の指導をしてもらったり、毎回さまざまなテーマで学ぶ。参加は任意だが、対象者の7～8割に当たる15人ほどが参加している。

「小・中学校の若い先生方が率直に話し合ったり、時には食事をしながら語り合ったりできる関係が築ければよいと思っています。研修会の日には学校を早く出られるように、各校で配慮してくれています。あくまでも自由参加として、例えば、家庭の事情などで出席できない先生の肩身が狭くならないように配慮しています」（瀧塚指導主事）

このような会の素地となっているのは、5校の校長と教育委員会の強固な信頼、協力関係だ。事務局を担う石井校長を中心に、小・中学校の校長と瀧塚指導主事が密に連絡を取り合い、意見や情報を交換している。

「校長にはそれぞれ『このような子どもを育てたい』という思いがあります。小中一貫

の取り組みについて議論する中で、校長同士が心を開き、考えを伝え合える関係になりました。今は例えば、教務主任が他校の教務主任の先生の仕事を見に行き、互いの良さを取り入れる交流も考えています」（石井校長）

教師全員が常に立ち戻れるプロジェクトの原点を冊子化

教育長からの呼び掛けがあった05年度当時は、皆、とても懐疑的だった。約2年掛けて、実態調査なども交えながらプロジェクトの意義を確認し、現在の取り組みを形成してきた。そして今、石井校長は改めて取り組みの意義を見直す時期にきていると言う。

「年月の経過や、教職員の入替わりに伴い、当初の課題意識や本来の目的があいまいになり、取り組みが表面的になってしまふ恐れがあると思いました。もう一度原点に戻る必要があると考えたのです」

石井校長は、編集委員長を務めていた10年度のプロジェクトの研究紀要に、当時の教育長の言葉を掲載することを考えた（図3）。

「05年当時、プロジェクト立ち上げの目的を話された教育長の講演記録が残っていました。その音声を何度も聞き直し、紀要の冒頭7ページにまとめました。誰もがいつでも立ち戻れる、阿久比町にいる全ての教職員が共通して持っているものを作りたいのです」

更に、石井校長は保護者への働き掛けも必

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

図3 プロジェクト立ち上げの趣旨(抜粋)

●正直者、一生懸命努力する子どもが生きる学校にしたい

どの学校、学級にも、授業についていけないにもかかわらず、黙って席に座り、まじめに授業に臨んでいる子どもがいます。この子どもは、これまでのどこかでつまずき、それでもまじめに一生懸命努力を続け、今日まで至っているのです。中学生になってから、これまでの積み残しを取り戻そうといくらがんばっても、なかなか成果は見られません。

阿久比町では、このような正直に一生懸命努力しているにもかかわらず報われない子どもに、真正面からかわっていきたくと考え、幼保小中一貫教育を立ち上げることとしました。

●それぞれの段階で、本当に責任を果たしているかを見極めなければ…

幼稚園や保育園に入園するまでの家庭の責任、幼保小中がかかわる教員や保育者の責任、それぞれの立場や段階でその責任は違います。その時期に身に付けるべきことが確実に身に付いているかどうかを見極める必要があります。(中略)

阿久比町幼保小中一貫教育では、各年齢に応じた「欠落なき教育」の実現をめざすこととしました。

●幼保、小、中の間に見えない壁がある。これを打ち破らなければ…

子どもは、年齢が上がるにつれて判断力が高まります。しかし、学校でのきまり・規則は、小学校で緩く、中学校で厳しいのが一般的です。逆ではないでしょうか。

阿久比町幼保小中一貫教育では、幼稚園や保育園、小学校、中学校の間のずれや逆転のない「段差なき教育」を進めたいと考えました。

●1町1中学校という利点を生かしたい

中学1年生のスタート時点で、子どもの力がまちまちでは、中学校での指導の効果を上げることはできません。(中略)

阿久比町幼保小中一貫教育では、幼稚園や保育園間、小学校間、さらに学級間で「落差なき教育」が進められることが大切であると考えました。

*第2回阿久比町幼保小中一貫教育実践発表会紀要「2010プロジェクト in 阿久比」より一部抜粋

石井校長が重視する

校長としての役割

「幼保小中一貫教育プロジェクト」を浸透させるために、決定事項として、先生方に具体的なお願いをすることもあります。新たな取り組みを始める時には、ある時期、校長としてこのようにリーダーシップを発揮することも必要だと考えます。

しかし、それだけでは取り組みは継続されません。日常的に、取り組みの意義を先生方に伝え、対話することを心掛けています。一人ひとりの先生方とコミュニケーションを取りながら、学校全体でより良い取り組みをつくっていきたくと思います。

要だと話す。

「保護者へのアンケートでは、『幼保小中一貫教育で何をやっているのか分からない』という声が寄せられています。まず先生方が同じ意識を持ち、取り組みを進めていけば、保護者の目に映る子どもの姿が変わっていくはずです。それが、保護者の理解・支援につながり、町全体に定着していくと思うのです」

●成果・今後に向けて

中1の不登校が激減 家庭学習へ取り組みを広げる

プロジェクトを始めて、中学1年生の不登校が激減した。かつては10人以上だったが、現在は1〜2人にまで減ったという。

「教師も子どもも少しずつ意識が変わってきていると思います。小中の教師が互いの授業を見合う機会が増え、例えば、6年生の学級担任が中学校について話す機会が増えるなど、中学校を意識した指導がなされつつあります。また、小学生が中学校の文化祭を見に行ったり、部活動で交流したりと、中学生の姿が見えやすくなったのも影響しているでしょう」(石井校長)

ただ、中学1年生の不登校は減ったものの、中学2年生になると以前と同じくらいの数の生徒が不登校になるといいます。

生徒が不登校になるといいます。

「私たちは、以前とつまずきの原因が変わってきているのではないかと捉えています。小中接続を原因とする問題は解消したけれども、中学校生活が進むにつれて学力不振と人間関係に関する問題が大きくなってきます。この2つについては、今後、更に取り組みを進めていきたいと考えます」(瀧塚指導主事)

今後について、石井校長は次のように話す。「なぜ小中一貫に取り組みのかという原点を大切にした上で、新たに家庭学習の分野に着手したり、これまでの課題を改善したりしながら実践を深めていきたいと思っています」

「きずな」「まなび」で子どもも教師もつながる「小し中ちゆう連携」

鳥取県 北ほくえい栄町立北条小学校

北栄町立北条小学校は、大半の卒業生が進学する同町立北条中学校と連携し、小学校低学年のうちから中学生と交流する機会を設けている。中学生の姿を見ることで、小学生は学習や生活習慣に対する意欲を高め、小学校の教師は子どもの発達段階を踏まえた指導を工夫するようになったという。

取り組みのポイント

- ◎北条小学校がある北栄町北条地区は小学校と中学校が共に1校で、卒業生の大半は同校から歩いて2～3分の距離にある北条中学校に進学する。北条小学校の児童数は418人、北条中学校の生徒数は225人
- ◎2002年に取り組みを始め、09年からは北条幼稚園を含めた幼小中連携にも取り組む。小中連携では、子ども同士が交流する「きずな」と、教師が協同で授業づくりや学習指導を研究する「まなび」の2つのプロジェクトを、連携の柱としている
- ◎これまでの研究を生かしながらも、内容を固定しすぎず、見直しや改善をしながら取り組みを進めている

S c h o o l D a t a

◎1961(昭和36)年開校。「豊かな心を持ち、未来をたくましく拓く子どもの育成」を主題に、道徳と国語の研究に取り組んでいる。2011年11月には、中小研究発表大会で道徳の授業を公開した。



校長 北村秀徳先生

児童数 418人 学級数 19学級(うち特別支援学級4)

所在地 〒689-2102 鳥取県東伯郡北栄町国坂680

TEL 0858-36-2063

URL <http://www.torikyo.ed.jp/hojo-e/>

公開研究会 未定

◎背景

義務教育9年間を見通す視野を連携によって育みたい

北ほくえい栄町立北条小学校は、ブドウ畑や水田が広がる鳥取県中部に位置する。以前は農業を営む家庭の子どもが大半だったが、最近では鳥取市や米子市に通勤する家庭の子どもも増えている。同校の卒業生のほとんどは、同校から200mほどの距離にある同町立北条中学校に進学する。このような環境を生かし、小学生と中学生との交流など、両校はさまざまな取り組みを行っている。北村秀徳校長は、中学校と連携するねらいを次のように話す。

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

「小学校と中学校には『文化』の違いがあります。そこに大きな壁を感じ、それぞれの学校で完結していました。しかし、私たち小学校の教師には、中学校に送り出した子どもがどのように成長するかを見取る責任があります。また、北条地区の小中連携では『豊かな人間性と確かな学力及び国際人としてのコミュニケーション能力を身に付け、社会に貢献できる人』の育成を目標にしています。義務教育9年間でこうした子どもを育てるには、中学校での姿もイメージしながら見通しを持って指導する必要があると考えました。子どもをつなげるために大人同士もつながら、両校の教師が共に子どもを育てる環境を整えることが大切だと思っています」

◎ 取り組み内容と工夫

「きずな」「まなび」の二本柱で 交流面と学習指導面の連携を図る

北条小学校と北条中学校の連携は、文部科学省の学力向上フロンティア推進事業への参加により2002年度に始まり、06年度から3年間、鳥取県の「小中連携強化事業」に取り組んで本格化した。同時に同町教育委員会の方針で、小中連携のための加配も始まった。09年度からは北条小学校に隣接した北条幼稚園も含めた幼小中連携事業「ドリームプロジェクトX」を立ち上げ、現在に至っている。小中連携は、両校とも担当を校務分掌に位置

付け、加配された教師がその任に当たる。連携には、2つの柱がある（P.18図1）。

① 「きずな」プロジェクト

小学生と中学生が相互に行う交流で、次のようなものがある。

◎ 特定の学年間の交流

小学2年生と中学1年生、小学3年生と中学2年生、小学4年生と中学2年生というようにペアになる学年を決め、各ペア学年が年1回、北条中学校で一緒に活動を行い、交流する。同じ児童と生徒がなるべく長く触れ合えるよう、ペアになる学年は連続させている。

◎ 「読み聞かせ隊」の実施

中学生が年5〜6回、朝読書の時間や放課後などに北条小学校に来て、本の読み聞かせを行う。中学生も小学生も希望者が参加する。

◎ 中学校の授業や行事の見学

小学生が中学校の文化祭や運動会などを見学する。また、中学校の授業の雰囲気を知るため、小学6年生には年1回、中学3年生の授業を1時間見学する機会を設けている。かつて北条小学校と北条中学校に勤務し、小中連携担当をしていた荒木啓子先生は、こうした交流の意義を次のように話す。

「小学生にとって中学生はお手本です。先輩の言動には、保護者や教師の言動の何倍もの説得力があります。『自分もあんなお兄さんやお姉さんになりたい』との思いから、生活習慣の改善や、学習意欲の高まりが見られ



北条町立北条小学校校長
北村秀徳 Kitamura Hiromori
「教師には、常に自己研鑽に励む使命がある。教師が努力してこそ、子どもは学びに向かう」



北条町立北条小学校
中本祐一 Nakamoto Yui
4学年担任。「どのような時にも、子どもから信頼される指導を追求していきたい」



北条町立北条中学校
金光美恵 Kanemitsu Mie
英語科、小中連携担当。「日々の努力の積み重ねが、大きな力を生む。頑張れば必ず夢が叶うことを伝えたい」



北条町立大栄小学校
荒木啓子 Aki Keiko
6学年主任。「成長を手助けできるように、常に子どもを見つめ、指導を工夫できる教師でありたい」



北条町立大栄中学校
石亀伸弥 Ishigame Nobuya
教務主任。「困難な時も揺るがない自我を持ち、自分の意見を自分の言葉で述べられる子どもを育てたい」



北条町教育委員会指導主事
桑本康昭 Kuwamoto Yasuaki
「先生方、地域の人たち一人ひとりの出合いを大切に、共に子どもを育てていきたい」

ます。また、思春期にある中学生は大人に対して感情を乱すことがあります。小学生には優しさや思いやりを素直に示します。小学生との交流は、中学生が本来の自分の良さに

図1

北条小学校と北条中学校の連携の年間計画（2011年度）

	通年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
小・中学校	読み聞かせ (年5～6回)	ドリームプロジェクトX全体会議			小2&中1交流	小3&中2交流		小4&中2交流	学習発表会(音楽)	中学校文化祭			中学校の入学説明会 (小6の体験学習)
小・中学校	教師の授業振り返り (年3回)	「家庭学習の手引き」の配布		合同授業研究会	「家庭学習の手引き」実践カードの実施とまとめ			「家庭学習の手引き」実践カードの実施とまとめ	合同授業研究会			「家庭学習の手引き」実践カードの実施とまとめ	

* 同校の資料を基に編集部で作成

目標
将来の夢や希望に向けて、生活の中で自らの生き方を自覚し、正しい判断の下、自らの手でたくましく生きる資質と能力を身に付ける

さずな

目標
児童生徒の「思考力・表現力」「学習意欲」を高め、確かな学力を身に付ける

まなび

気付き、自尊感情を育む機会にもなるのです」
②「まなび」プロジェクト

両校の学習指導の方向をそろえるため、「ねらいの明確化」「具体物の使用」「自力解決、教え合いの時間の確保」「学習準備物の点検」「時間を守る」「子どもの声を積極的に取り上げる」の6つの指導ポイントを共有し、定期的に合同授業研究会を開いている。

11年度は新たに家庭学習指導に力を入れようと、次のような取り組みを「まなび」プロジェクトに加えた。

◎「家庭学習の手引き」(図2)の配布

家庭学習への保護者の理解と協力を呼び掛けるプリントで、4月に各家庭に配布した。

◎「家庭学習の手引き」実践カードの実施とまとめ

家庭学習にどれだけ取り組んでいるかを子ども自身が記録するカード。普段の家庭学習を振り返り、家庭学習が十分に出来ていれば○、不十分であれば△を記入する。年3回、1週間ずつ、両校で同時に行う。

「さずな」と「まなび」を組み合わせた活動も始めた。北条小学校に中学3年生を招き、中学校の学習では予習・復習がいかに大切かを6年生に話してもらった機会を設けたのだ。

北条中学校の小中連携担当である金光美恵先生は、このねらいを次のように話す。

「小学生の頃から予習・復習の習慣を付ければ、中学校の学習に早くなじめると考えま

した。『予習した方が授業がよく分かるから楽しいよ』といった先輩の体験を聞くことで、小学生のやる気を伸ばせばいいと思います」
両校が連携した取り組みの様子は、小中連携に特化した学校だより「小っ中連携！」(P.20 図3)を両校共同で月1回発行して、保護者に伝えている。

子どもの実態に応じて 絶えず活動を変化させる

2つのプロジェクトでの活動は、両校の小中連携担当がまず学級担任や管理職の意見を聞き、それを担当同士で検討していく。どの教師も当事者意識を持って取り組めるよう、毎年4月に両校の全教師が集まり、前年度の成果と課題を話し合う機会を設けている。

「子どもの個性は多様であるため、同学年であっても、前年度の活動が今年度の子どもに合うとは限りません。また、活動の準備に時間が掛かるといった課題が見付かることもあります。そのため内容はあえて固定せず、子どもの実態や先生方の声に合わせて、毎年見直すようにしています」(北村校長)

取り組みを固定し過ぎず、状況に応じて改善していく柔軟な姿勢は、取り組みの変遷にも表れている。連携を始めた当初は小学生と中学生が交流する「さずな」が中心だったが、2～3年後、授業づくりの意識をそろえる「まなび」を新たな柱として加えた。

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

図2

家庭学習の手引き(5・6年生用)

家庭学習の手引き 北条小学校 5・6年

家庭学習の意義

- 1 学校で学習した内容をより確かします。
- 2 家庭での学習習慣が身に付きます。
- 3 自ら学ぶようになる態度や学習に対する自信が身につきます。
- 4 脳が活性化し、鍛えられます。
- 5 がまん強さ・根気・集中力が身に付きます。
- 6 家族がふれあう機会となり、子どもの精神の安定につながり、心身も健康も健やかに育ちます。

保護者の皆様へ

北条小学校では、子ども達の学力向上に取り組んでいます。そのためには、家庭の協力が必要です。家庭と協力し合うことで、さらに子ども達の力は何倍にも高められます。家庭学習の習慣化が子ども達の「生きる力」を高めていくと考えられます。ご協力をお願いします。

生涯にわたる「学び」へとつながります。

5・6年生はこんな時期

- 一人前に成長してもらっているが、大切にされているかなど、大人の評価が気になります。
- 自分を客観的に見つめたり、友達と自分を比べたりするようになります。
- 考える力も大人並みになり、時には、大人への反抗も見られます。
- 心も体も急激に変化します。心と体のバランスがくずれ、不安定になることもあります。
- 得意な教科と苦手な教科を意識し始めます。
- 先生や家族のアドバイスにより、学習に対する意欲や興味、関心が大きく左右されます。
- 小学校の学習のまとめをして、中学校へつなげる大切な学年です。

◎見守って 伸ばす 高学年◎

学校の主な学習内容

- ・ 家庭科の学習が始まります。
- ・ 外国語活動が増えます。(週10時間)
- ・ どの教科も学習内容が多くなります。
- ・ 新出漢字は、5年生185字、6年生180字です。
- ・ 新道を立てて考える論理的な内容の学習や、抽象的なものの見方が求められます。
- ・ 自分で課題を見つめ、解決してこのおもしろさを体験させ「学び方」や「ものの考え方」を育てます。

家庭学習の習慣化づくりのポイント

家庭学習を始める前に

- 学校からの連絡やお便りを親に手渡す習慣をつけさせましょう。
- 宿題を自分で確かめ、やる順番を決めさせましょう。

- 1 決まった時間に学習する。
- 2 集中して学習する。(時間のみやす 60分)
- 3 家庭学習をしているときは、テレビを消す。
- 4 整理された場所でのよい姿勢で学習する。
- 5 「1日のふし」の日記を書く。
- 6 前日に次の日の学校へ行く準備をする。(時間割をする・鉛筆をけずる・持ち物の用意をする)

※宿題以外の学習にも挑戦させましょう。
※毎日「1日のふし」にサインをお願いします。
子どもが安心します。

家庭学習 こんな内容・方法で

習題

学校での学習をより活きながら、教科書やノートを参考にし、習題や他の教科の教科書を音読すると、重要な用語や内容を理解できるようになります。

国語 音読

- ・ 間を取りながら読むなど、自分のためを決めて練習しましょう。
- ・ 詩や俳句、短歌などを暗唱したり、朗読しましょう。
- ・ 他の教科の教科書を音読すると、重要な用語や内容を理解できるようになります。

漢字

- ・ 漢字の構成や字形を意識して練習しましょう。
- ・ 習った漢字を使って、熟語や短文を作りましょう。

読書

- ・ 家族で感想を語り合い、共に心を温めることができる関係を築きましょう。

算数 計算

- ・ よく間違える計算は、繰り返し練習しましょう。
- ・ 問題ごとに、答えの確かめを自分でするようにしましょう。
- ・ 定規やコンパスを使って正確な図形がかけられるようにしましょう。
- ・ 問題文を声に出して読み、「わかっていること」「きかれていること」を正確に読み取るようにしましょう。
- ・ 問題の内容を簡単な図に表してから、式を立てる習慣を作りましょう。
- ・ 家庭科で学習したことを、家庭生活の中で実践しましょう。
- ・ 学んだことを生かし、家事の分担を考えましょう。

自主学習

国・算・理・社・家庭科・音楽・総合……、自主学習の教材は、豊富です。まずは、好きな学習・得意な学習から始め、毎日取り返るようアドバイスしましょう。

自主学習にチャレンジ

- ・ その日に学習したことをノートに工夫してまとめてみましょう。
- ・ 理科や社会、総合的な学習等で学習した内容で、もっと知りたいことを資料を使って調べ、ノートまとめてみましょう。
- ・ 地名、程序所在地、山地、川、世界の大陸、主な国の名前、歴史上の人物、環境、天気の変化、水質の性質……など、ノートをつけておもしろくまとめてみましょう。
- ・ すずんで学ぶ好奇心を育てるために、図鑑や辞典を子どもの名前に置きましょう。
- ・ リコーダーや鍵盤ハーモニカの練習にも進んで取り組まましょう。

声かけの工夫をしましょう

子どもの話をよく聞き、成長を温かく見守ることで、将来の夢や目標をもち、努力できるようにになります。

規則正しい生活習慣

- 1 「早起・早起き・朝ご飯」の習慣をお願いします。
- 2 毎日、少しずつでも運動ができるよう声かけをお願いします。
- 3 テレビやゲームの時間を話し合って決めましょう。

小学1年生用、小学2年生用、小学3・4年生用、小学5・6年生用、中学生用の5種類を作成。□で囲んであるところは、学習時間のめやすを除き、小学生用の全学年で共通化している部分。他は子どもの発達段階によって変えている。小学生用と中学生用は、基本的な構成と「家庭学習の習慣化づくりのポイント」の中心部分が共通

*同校の資料をイラストのみ変更して掲載

「家庭学習の手引き」は、Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトからダウンロードできます
<http://benesse.jp/berd/>→情報誌ライブラリ (小学校向け)

両校の指導に当たる北条町教育委員会指導主事の桑本康昭先生は、小中連携で子どもの学習意欲が高まっていると話す。

「小学生は、やがて自分たちが中学生として小学生と交流する日が来ることを楽しみに

●成果・今後に向けて 教師全員が無理なく参加できる 体制づくりを目指す

「子ども同士が直接交流する機会は、多くは設けられません。その中で小中連携を強めていくために何が出来るかを考えた末、毎日の営みである『授業づくり』を共に行い、小中で共通化できるところはしていこうと話がまとまりました」(荒木先生)

北条町教育委員会の人事交流により、両校で毎年1人ずつ教師を交換していた時期もあった。小学校の細やかな指導を中学校に広げ、中学校の専門性のある指導を小学校で生かすというように、小・中学校それぞれの特長を取り入れようとしたのだ。4学年担任の中本祐二先生は、北条中学校と北条小学校に勤務した経験を次のように振り返る。

「中学生を教えたことで、小学校に戻ってからはそれまで以上に子どもの成長を思い描きながら指導できるようになりました。同時に、小学校と中学校では子どもの発達段階が異なること、それぞれに違った教育のスタンスがあることも、改めて感じました」

学校だより「小っ中連携！」

図3



常に連携を意識するというねらいを込めて、「小中」と副詞「しよっちゅう」をかけたタイトルとした。「きずな」や「まなび」のねらいや取り組み内容を細かく伝える。11年度は、「きずな」の交流として、小学2年生と中学校1年生が英語を使った活動、小学3年生と中学2年生が水泳、小学4年生と中学2年生がゴスペルの鑑賞を行った

*同校の資料をイラストのみ変更して掲載

しているようです。「いつか、自分がしてもらったことのお返しをしたい』『小学生に対して恥ずかしくない自分でいたい』という気持ちだが、目の前の学習に精いっぱい取り組む原動力になっていると思います」

中本先生は、教師の意識も変わったと話す。「異学年の交流の中で、普段の授業とは異なる子どもたちの姿を見ることで、小中連携は必要なものと考え先生が増えてきました。中学校を含めた子どもの姿を知り、『自分の学年ではこのような姿を目標にしよう』と、学年ごとの見通しを持って育てられるようになってきたと思います」

一方、長く取り組んでいるからこそその課題もあると、北村校長は話す。

「誰が異動しても連携を続けられるような体制づくりが必要です。また、2つの柱に当てはめようとする義務感が強くなってしまうと、『忙しいのに取り組まなければならない』『結局、効果的な活動にはならなかった』と、消極的な声が聞かれることもあります」

この点で参考になるのは、町内にある北条町立大栄小学校と同町立大栄中学校の連携だ。大栄中学校の教務主任である石亀伸弥先生は、両校の連携について次のように話す。

「年間スケジュールにとらわれず、既存の

北村校長が重視する

校長としての役割

連携活動には、継続性が求められます。先生方の熱意に頼るばかりでなく、自ら企画を立てるなど、校長自身が積極的に取り組む必要があります。管理職が率先してこそ、先生方の心を動かせるのです。

本校には、これまでの連携の成果やノウハウが蓄積されています。この貴重な財産を次の世代に引き継げるよう、教育委員会や地域の方々の協力を得ながら人的体制を整えていきたいです。そして、先生方のゆとりの時間を確保し、誰もが当事者意識を持って取り組めるような体制を追求していきたいと考えています。

取り組みの見直しや新しい試みを取り入れながら出来ることを出来る範囲で続ける、いわば緩やかな連携です。先日は大栄小学校の先生から学習発表会の合唱指導を頼まれ、本校の音楽教師が空き時間に教えに行きました」

北条小学校と北条中学校の連携は過渡期を迎えていると、中本先生は説明する。

「これまでの継続によって、取り組みの形が整ってきました。その半面、ねらいがあいまいになったり、教師の充足感が薄れたりしている面があります。スクラップ・アンド・ビルドの精神で従来の活動を見直し、より実りのある連携を目指して、今後の形を模索していくことが重要だと思っています」

小中の教師が共通の視点で 授業を評価するシートを活用

東京都 世田谷区立太子堂小学校

世田谷区立太子堂小学校と同区立太子堂中学校は、小学生が4日間中学校に通う「1ウィークプレ中学生」や小中の教師が共通の視点で子どもを見取る「授業力診断シート」の取り組みを始めた。小学校・中学校の枠組みを超えて、子どもと教師の意識が変わり始めている。

取り組みのポイント

- ◎3校の小学校から1校の中学校に行くが、進学者のほとんどが太子堂小学校の児童である
- ◎6年生が4日間、中学校で生活する「1ウィークプレ中学生」を実施。中学校で授業や部活動などを体験する
- ◎「1ウィークプレ中学生」では、小学校の全学年の担任が、中学校で過ごし授業を受ける子どもの様子を見学する
- ◎小学校の授業研究会に中学校の教師全員が参加。共通の「授業力診断シート」を使い、特に重点を置いて見て欲しい項目を中心に同じ視点で授業を見て、話し合う

●背景

6年間の成長を 中学校にいかに関き継ぐかが課題

閑静な住宅街にある世田谷区立太子堂小学校は、地域の祭りの会場になるなど、地域社会と深いつながりのある学校だ。通学範囲が広く、私立中学校に進学する子どもも一定数いるため、全ての卒業生が同じ中学校に進学するわけではない。しかし、中学校との接続を強化することは、重要な課題と捉えている。その背景は次のようなものだ。

まず、子どもの基本的な生活・学習習慣や意識の面で、中学校が期待する状態で送り出

S c h o o l D a t a

◎1929（昭和4）年開校。渋谷駅から電車で5分程の住宅街の中に位置する。「せたがや9年教育」を標榜して小中一貫教育に取り組む他、「エコライフ活動」など独自の活動も積極的に進める。



校長 吉野勇次先生

児童数 433人 学級数 14学級

所在地 〒154-0004 東京都世田谷区太子堂5-7-4

TEL 03-3413-4621

URL <http://school.setagaya.ed.jp/tau/>

公開研究会 未定

せていないのではないかとという心配があったと、吉野勇次校長は話す。

「中学校では、『話をきちんと聞ける』『言われた通りに行動できる』など、いわば当たり前のことが当たり前になる状態が期待されています。そのためには、小学校低学年で行っている『母親役』のような指導を、高学年になるにつれて自立させる指導に転換しなければなりません。しかし、元々中学校を意識した指導をあまりしてこなかったため、子どもが教師に頼らずに自分で考える姿勢が不十分で、中学校での指導に戸惑うケースがあるようでした」

同校は、子どもの成長過程や指導方法を、中学校と共有し、中学校を意識した指導をもっと取り入れたいと考えた。そうすることで、中学校の小学生に対する理解も深まり、6年間で培った力がしっかりと引き継がれるという期待があった。

ただ、中学校には「子どもの自覚を促すために、環境の変化などのギャップはある程度あった方がよい」という考えもあり、その点で小中連携を進めることに対して異なる意見もあったという。10年度まで研究主任を務めていた梅田正弥先生は次のように話す。

「確かに環境の変化がプラスになることはあります。しかし、不登校に最も陥りがちなのは中学1年生で、この時期につまずく可能性がとても高いのです。学習に向かう姿勢、

礼儀やあいさつなど、9年間で系統的に指導した方がよいことについては、出来るだけギャップをなくすよう、中学校と協力し合っ

て取り組みたいと考えました」
また、吉野校長は、小中連携の取り組みを進めることで、子どもや保護者に公立中学校への信頼を深めてもらいたいと考えている。「私立中学校への進学が増えつつある中で、公立小学校の教師として、地域の公立中学校にも安心して進学してほしいという思いがあります」

教科研究の文化の違いから 教科指導の連携に課題

同校はこれまでも、中学校の教師が小学校で出前授業をしたり、小学生が中学校の部活動を体験したりといった連携は行っていた。しかし、こうした取り組みに「行き詰まり」を感じていた面もあったという。

「特に課題を感じていたのが、学力を高める上で重要な教科指導における連携でした。大きな原因の1つは、教科研究の進め方が小学校と中学校で違うことです。小学校は授業研究を頻繁に行い、学校全体で研究に取り組みますが、中学校では生活指導が中心となり、教科研究は個々に任せることが多いようです。以前から本校の公開授業などに中学校の先生方を招いていましたが、この違いが壁となり、あまり成果が得られませんでした」(梅



世田谷区立太子堂小学校校長
吉野勇次 Yoshino Yuji
「どんな逆境にあっても、たくましい心と健康な体によって乗り越え、夢を実現できる子どもを育てたい」



世田谷区立太子堂小学校
教務主幹補佐、5学年担任。「人として向上心を忘れず、常に成長し社会に立派に参画できる人間でありたい」
梅田正弥 Umeta Masaya

田先生)

中学校の教師には、自分の専門以外の教科について発言することをためらうという雰囲気があり、せっかく小学校の授業研究会に参加しても、教科指導の連携を考えるレベルまで話し合いが深まらなかったという。

● 取り組み内容と工夫

4日間中学校に通う 「1ウィークプレ中学生」

これらの課題を解決するために、10年度、世田谷区立太子堂中学校と協力して準備を進め、11年度から本格的に小中連携の充実を図っている。

9月に行ったのは「1ウィークプレ中学生」だ。水曜から土曜までの4日間、6年生が小学校の担任と共に中学校に通う(写真)。

「中学校の教室で過ごし、中学校の先生の授業を受けたり、部活動を体験したりするこ

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ



写真 「1ウィークプレ中学生」で小学校にはない技術の授業を受ける子どもたち。いくつかの教科の他、中学校の生徒会活動も見学して、中学生への意識を高めた

図1 「1ウィークプレ中学生」の時間割(6年1組の例)

	7(水)	8(木)	9(金)	10(土)
1	対面式	英語	日本語	算数
2	国語	国語	技術	道徳
3	社会	プール	音楽	生徒会
4	理科	太子堂タイム	国語	保護者説明会
5	算数	社会	数学	
6	部活動体験	算数	算数	

実際の時間割。囲みが中学校教師による授業など。土曜には保護者説明会を実施

*同校の資料を基に編集部で作成

とで、中学校生活を体感させ、来春から中学生だという自覚を芽生えさせることが最大の目的です」(吉野校長)

これまで別々の時期に行っていた中学校教師の出前授業や部活動体験、保護者説明会などをまとめて行えるというメリットもあり、実施に踏み切った。いくつかの課題もあったが、保護者が通学路に立って安全を確保する、給食は小学校で作ったものを中学校に運ぶなど、一つひとつを解決して実現に至った。

期間中の授業は、小学校の担任が行う通常の授業と、中学校教師が行う授業がほぼ半々の割合だ(図1)。普段受けている担任の授業でも、中学校の教室で行うため普段とは異なる緊張感が生まれたという。通常より5分長い50分間授業であることも子どもにとっては特別な体験だ。

「5分違うだけでも、かなり長いと感じた子どもが多かったです」(梅田先生)

中学校教師の授業では、小学校の単元の内容ではなく、中学校での各教科の学び方などを中心に進めた。中学校の授業内容が小学校の授業内容とどのようにつながっていくかを説明する教師もいたという。多くの子どもが中学校の授業への理解を深められたようだ。

「授業力自己診断シート」で

小中の教師が同じ視点で授業を参観

11年度は、授業研究会の見直しも進めた。

教科指導の連携がなかなか深まらないという課題の克服が大きなねらいだ。

「本校の授業研究会に参加する太子堂中学校の先生は、10年度までは数人程度でした。11年度は年度当初にスケジュールを伝え、全ての先生に参観してもらえよう工夫しました。その結果、小・中学校の総勢約40人の教師が参加して、公開授業や事後研究会を実施しました」(梅田先生)

同様に、太子堂中学校の授業研究会には太子堂小学校の全教師が参加している。11年度は、小学校では理科と体育、中学校では技術・家庭と、計3回、合同の授業研究会を実施した。同小学校は20代の若手教師が多く、実験が多い理科の授業があまり得意ではない教師もいる。そこで、若手教師がベテラン教師の指導技術を継承すると共に、中学校教師から専門的なアドバイスを受けられるよう、教科の1つに理科を選んだ。

更に、教科指導の連携の充実を図るために新たに導入したのが、公開授業の際、参観する教師が授業を見る視点を定めた「授業力自己診断シート」だ(P.24図2)。シートには授業を構成する要素が各項目に分類され、それぞれを4段階で評価するようになってる。

「自己診断の項目は、教科の中身ではなく、授業観や指導観、指導技術など、教科に共通する内容となっています。このシートを使え

ば、中学校教師が専門外の科目を参観した場合でも、どのような観点で授業を見ればよいかが明確になり、発言をしやすくなります。また、このシートは、授業者が自己評価をするためにも有用です」(梅田先生)

公開授業を行う教師は、特に重点を置いて見てほしい項目を3つ程度、あらかじめ伝えておく。参観する教師は、その項目について、良かった点や課題などを、3色の付せんに分

けて記入する。事後研究会では、小・中学校の教師が混ざるようにグループ分けをして、付せんの内容を基に意見を出し合い、模造紙にまとめて全体に発表する。

このシートを用いることによって、以前に比べ、中学校教師から、子どもへの声掛け、指示の出し方、動かし方、教材の提示の方法、学級掲示の工夫など、具体的な指摘や提案が出るようになったという。

「『1ウイークプレ中学生』は、小学校と中

子どもと教師の意識に変化
同じ方向性で研究を継続

◎成果・今後に向けて

図2 「授業力自己診断シート」

授業力自己診断シート(大志の学び舎)					
世田谷区立太子堂小・中学校 氏名() 授業日 年 月 日 校時					
番号/分類	診断項目	4	3	2	1
1	授業を通して児童・生徒にどのような力を身に付けさせたいのかが、明確な目的をもって、	4	3	2	1
2	授業改善を目指し、研修に連んで取り組んでいる。	4	3	2	1
3	自らの専門性を生かし、教材研究を行い、授業に臨んでいる。	4	3	2	1
4	適切な学習環境を用意し、学習活動を喚起させている。	4	3	2	1
5	児童・生徒一人一人の学習意欲・学習状況を把握している。	4	3	2	1
6	児童・生徒一人一人の発達段階を的確に把握している。	4	3	2	1
7	児童・生徒一人一人の学習状況等を基に、単元の目標を立てている。	4	3	2	1
7	【特別支援教育】児童・生徒の一人一人の障害の特性を把握している。(アセスメントも含め)	4	3	2	1
8	授業の始業・終業時刻を守っている。	4	3	2	1
9	基本的な学習のルールを定着させている。	4	3	2	1
10	的確な指示や説明を行い、集団を動かしている。	4	3	2	1
11	学習状況や児童・生徒の反応を飲み取り、対応している。	4	3	2	1
11	【特別支援教育】授業を進めたい上で、授業者の役割分担が適切に行われている。	4	3	2	1
12	授業の始めに児童・生徒に対し、学習のねらいを明確に示すことで、学習の見通しをたせている。	4	3	2	1
13	学習のねらいを達成するための説明・説明を行っている。	4	3	2	1
14	児童・生徒一人一人に声をかけるなど、個に応じた指導を行っている。	4	3	2	1
15	学習のねらいに応じて、効果を高める教材・教具を効果的に活用している。	4	3	2	1
16	ICTなどの視覚覚知機能の特性を踏まえ板書計画を立て、学習の成果を上げていく。	4	3	2	1
17	児童・生徒の学習意欲を引き出し、主体的な学習を促している。	4	3	2	1
18	授業のまとめを工夫し、学習の達成状況について確認している。	4	3	2	1
18	【特別支援教育】児童・生徒が学習に集中できるよう、教室環境の最適化を行っている。	4	3	2	1
19	専門的知識を活用し、教材解釈や教材開発に関する情報を収集している。	4	3	2	1
20	学習のねらいを理解し、単元ごとの重点内容や留意事項を踏まえながら教材解釈や教材開発をしている。	4	3	2	1
21	児童・生徒の背景を理解し、学校・地域の特徴を生かした教材解釈や教材開発をしている。	4	3	2	1
22	児童・生徒の興味・関心を引き出す教材解釈や教材開発をしている。	4	3	2	1
23	単元の指導目標を踏まえた指導計画を立てている。	4	3	2	1
24	学習のねらいに対する評価の観点と場面・方法を設定した評価計画を立てている。	4	3	2	1
25	評価計画に基づき、児童・生徒の学習の達成状況を評価している。	4	3	2	1
26	適切な指導計画・評価計画であったかの振り返りを基に、次の指導計画・評価計画を立てている。	4	3	2	1
26	【特別支援教育】児童・生徒一人一人の「個別指導計画」を踏まえて指導計画・評価計画を立てている。	4	3	2	1

※本シートは「学力向上を図るための指導に関する研究『授業力』向上のためのITシステムの開発」(東京教育開発センター平成18年3月)における「自己診断シート」を基に、「大志の学び舎」用として内容を一部再構成した。

*同校の資料をそのまま掲載

図3 「1ウイークプレ中学生」教職員へのアンケート結果(一部抜粋)

◎小学校

- 終了後、子どもがたくさん思い出(プラス面もマイナス面も)を伝えて来てくれた。6年生にとっても、とても印象深い4日間になったようだ。
- 授業中に私語への厳しさを感じたようだ。話を聞いていない生徒は放っておかれるというシビアさを体験できたと思う。
- 中学校との温度差を感じた。さまざまな教材を工夫している先生の授業を見て、自分の授業に生かしたいと感じた。
- 授業時間が長かったと訴える子どもがいた。開始前に中学校の時間割に慣れさせる工夫が必要かもしれない。
- できる限り全部の教科の中学校の先生から教えてもらいたい。

◎中学校

- 小学生にとっては、50分授業や実技教科の体験などを通して中学生への意識が高まったと思う。
- 「中1ギャップ」は多少なりとも、解消されたのではないかと思う。
- 小学生の作業の理解力や作業速度を見ることができ、中学生の指導に対して参考になった。
- 来年、太子堂中学校に来るかもしれない児童の雰囲気・様子が見えた。
- 前もって、小学校の先生から、英語学習の様子や生徒のレベルを聞くことが出来た方がよかった。

*同校の資料から抜粋し、編集部で作成

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

学校の教師が小中連携における課題を意識する大きなきっかけです。それを発展させ、子どもを見取る共通の視点を持ち、恒常的に授業を改善するために有効なのが『授業力自己診断シート』だと捉えています」（吉野校長）

子どもからは、「1ウイークプレ中学生」を通して、「もうすぐ中学生になる」という自覚が高まり、「残りの小学校生活を充実させようと思った」「私語への厳しさが分かった」といった実感のこもった感想も寄せられた。次年度以降は、中学校で受ける授業を全教科に広げたいと考えている。

吉野校長は、「1ウイークプレ中学生」の期間中、6年生以外の担任にも中学校を訪れるように促した。それにより、教師の中学校に対する理解も深まったという（図3）。

「低学年の教師を含め、実際に中学校を訪れることで、これまで『6年間』で考えていたことを、中学校までを視野に入れた『9年間』として捉えるきっかけになったと思います。小学校生活を通して最終的などの段階まで育てる必要があるかという感覚も育まれてきたようです」（吉野校長）

また、中学校は教科担任制で、教える量も多く、小学校とは授業の方法がかなり異なることに、教師は改めて気付いたという。こうした違いを理解すれば、小学校の指導を少し変えて、ギャップを解消しようという気持ち自然と生まれてくる。

「1ウイークプレ中学生」は、中学校にも変化をもたらしている。小学生を受け入れることで、これまで以上に多くの教師がかかわることになり、全体的に小中連携への理解や関心が深まった。

「小学生の作業速度が思った以上に遅いため、導入期の指導に工夫が必要だということなど、さまざまな気がつきがあったようです。子どもの実態をじっくりと見られるため、新入生に対する心構えや準備がこれまで以上に整うことも期待しています」（吉野校長）

また、「授業力自己診断シート」により、学校種や教科を超えて授業を見合えるようになったことで、中学校の体育教師から小学校の体育の授業では準備体操が不十分ではないかという指摘を受けるなど、専門性を生かしたさまざまなアドバイスも出ている。逆に、小学校の授業を参観して、特別な支援を要する子どもへのアプローチの仕方や校内の掲示物などに関して、中学校として改善のヒントを得たといった発言もあった。

このような取り組みを通して小・中学校のつながりが深まったことは、授業研究会にも相乗的な効果をもたらしている。

「小学校の指導や子どもの実態をより深く知った上で授業研究会に参加してもらっているため、実りのある話し合いが来ています」（梅田先生）

11年度より「1ウイークプレ中学生」や「授

業力自己診断シート」を使った合同の授業研究会など、小・中学校の教師が顔を合わせる機会が増え、教師同士の人間関係もかなり深まってきた。

新たな取り組みはいずれも良い成果が出ているため、今後も、現在の方向性で研究を進めていく方針だ。

「学校現場は、それぞれの教師が創意工夫を発揮し、それを互いに見て、高めることのできる『研究所』であるべきだと考えています。教師一人ひとりが試行錯誤し、『子どもにこんな変化があったから、全体に広げてみよう』といった雰囲気の研究を進められる教師集団でありたいと思います」（吉野校長）

吉野校長が重視する

校長としての役割

多忙な先生方の意識を変えていくのが校長の役割です。小中連携では、双方の校長が課題をしっかりと話し合い、教師に働き掛けることが大切だと考えます。あまり難しく考えず、まずは「子どもを見合おう」という気軽な気持ちで始められるように促しています。

取り組みの全ては、「人」の熱意で始まるものです。経験や立場にかかわらず、熱意のある人が「これやりたい」と言いだし、仲間がどんどん増えて全校に広がっていくような学校づくりを、校長として目指したいと思います。



今回のテーマ

授業を「みとる」「力を高める工夫

公開授業に対する視点やその深さは、参観する教師の力量や経験によってまちまちだ。教師一人ひとりが授業を分析する力を高めれば、事後研究会での議論が深まると共に、参観者とその授業の特長を自分の指導に取り入れることも出来る。今回は、教師が授業をみる目を養う工夫をしている事例を紹介する。

事例

高知県高知市立新堀小学校

「みとりシート」で授業の流れや構造を捉え、事後研で討議

時系列の記録シートで
授業の本質を捉える

高知市立新堀小学校は、公開授業時の参観者への配布物や事後研究会の方法などを工夫し、教師の授業をみとる力を高めている。山中文恵校長は、その意義を次のように話す。

「子どもに確かな力を付けるには、教師一人ひとりの力量形成が必要です。ベテランも若手も共に力を伸ばせるような環境を整えてきました」
公開授業では、どの教師も「みとりシート」に記入しながら参観する

(図1)。シートには「教師の発問・指示・評価」「児童の発言・反応・記述」「気づき・感想」の3つの欄を設け、参観者は授業で気になったことをそれぞれ時系列に沿って書く。この行為自体が、授業を構造的に捉える力を高めると考えて始めた。

研究主任の門脇綱先生は、「みとりシート」を用いる理由を次のように話す。
「授業中の子どもは、発言が多くても深く考えていなかったり、逆に静かでも目標に向かっていたりすることがあります。授業を参観する時

には、子どもの表面的な姿をただ『みる』のではなく、『本当に子どもに力が付いているか』と、授業を深く分析する視点が求められます。本校では本質を見極めたいという願いを込めてシートを活用しています」

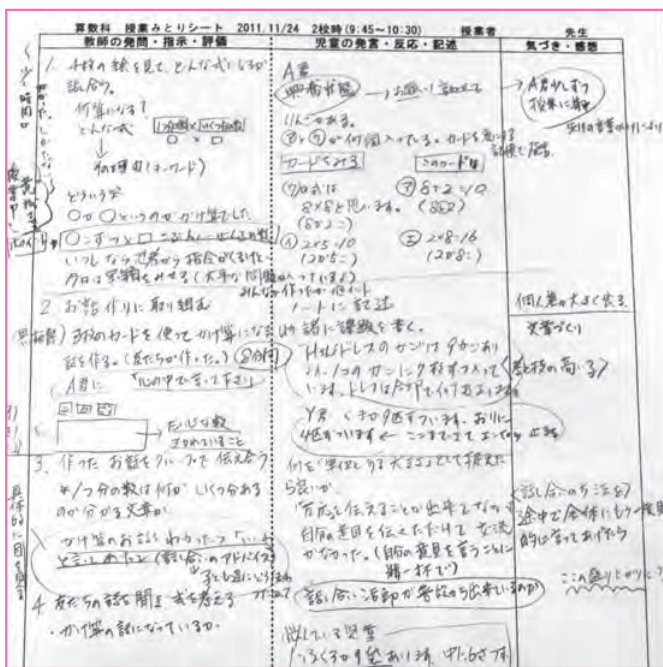
子どもを十分にみとるため、各児童の「関心・意欲・態度」「話す・聞く」「書く」「読む」それぞれの力を評価した座席表も配布する(図2)。6学年担任の川上確也先生は、このねらいを次のように話す。
「誰にどのような課題があるのかひと目で分かるため、『課題に対し

てふさわしい指導をしているか』を判断しやすくなります」

事後研究会では、各教師が「みとりシート」への記入内容を基に、授業のポイントを付せんに書いて話し合う(図3)。このプロセスが、参観した授業の良い点や課題を端的にまとめる力の向上につながる。2学年主任の前田妙子先生は、事後研究会について次のように話す。

「授業を全員で討議し、良い面や課題などを示してくださいるため、授業研究の成果を自分のものにする上で非常に有益な場となっています」

図1 「みとりシート」



授業をみる力は教師の力量や経験などによって異なるため、「みとりシート」に記入される内容はさまざま。事後研究会では、その差異から議論が生まれやすくなる *同校の資料をそのまま掲載

「みとりシート」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます
<http://benesse.jp/berd/>→情報誌ライブラリ(小学校向け)

図3 事後研究会の流れ

① 授業者の振り返り(5分)	授業者が本時授業で工夫したポイント、反省、感想などを述べる
② 付せん記入(10分)	参観者が「みとりシート」から特に発表したい内容を、「気づき・疑問」などの見出しと共に付せんに書き込む
③ グループ討議(20分)	付せんの内容を共有、グループ分けをしながら授業について討議する
④ グループ発表(20分)	各グループが討議した内容を全体で共有する
⑤ 授業者の見解(10分)	授業者が参観者の疑問や課題に対する意見などを述べる
⑥ 意見・感想(10分)	意見のある教師が発言。校長や研究主任が今後の方向性を示す



各グループの発表時は、授業中の板書をスクリーンに映し出す。必要に応じて参照しながら進めることで、どの場面での議論なのかをすぐに、詳しく確認できる

School Data

高知県高知市立新堀小学校



◎1947(昭和22)年開校。高知県の名所・はりまや橋の近くに位置する。2009年より高知県教委の「目指せ! 教育先進校応援事業」指定校となる。14年度に追手前小学校と合併し、はりまや橋小学校となる予定。

校長 山中文恵先生
 児童数 273人
 学級数 14学級(うち特別支援学級2)
 教員数 26人
 所在地 〒780-0822
 高知県高知市はりまや町2-14-8
 TEL 088-882-0168
 URL なし
 E-mail shinbori-e@kochinet.ed.jp
 公開研究会 未定

座席番号	関	△	座席番号	関	
	聞	○		聞	◎
	書			書	
	読	△		読	○

図2 座席表

全ての児童について、十分に満足できる状況には◎、満足できる状況には○、特に指導や配慮を要する状況には△を書く。担任が授業前に、参観する教師に指導案と共に配布する



高知市立新堀小学校の学年主任・人権教育主任
前田 妙子
 Maeda Taeko
 「公開授業をする際は、参観する先生の授業づくりのヒントになるように、自分なりの提案を必ず盛り込んでいる」



高知市立新堀小学校6学年担任
川上 確也
 Kawakami Kakuya
 「教師が良きコーディネーターに徹し、子どもが主役になるような授業研究を皆で深めたい」



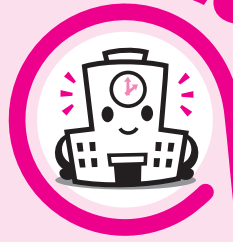
高知市立新堀小学校研究主任・5学年担任
門脇 綱
 Kawasaki Kou
 「先生方の力量やエネルギーは個々に異なるため、全員が納得できる方法を探しつつ、研究の道筋を立てている」



高知市立新堀小学校校長
山中文恵
 Yamataka Fumie
 「先生方が安心して授業改善に取り組めるような、活気があり、かつ落ち着いた学校づくりを心掛けています」

授業研究に学校全体で主体的に取り組むために「心掛けています」

つながる



学校と家庭の学び

個人別生活習慣改善で 目指す家庭学習の習慣化

岐阜県中津川市立付知南小学校

中津川市立付知南小学校は、年3回実施する家庭学習調査の結果から一人ひとりの生活習慣を把握し、家庭学習指導に生かしている。また、子どもがこれまでの調査を振り返り、次の目標を決めることで、目標に向かって努力する気持ちが生まれ、生活習慣が改善している。

学習内容の定着を目指し 家庭学習指導に取り組み

中津川市立付知南小学校は、岐阜県南東部に位置する単学級の学校だ。子どもは人懐こく素直で友達との仲も良いが、宿題の提出率が低い学年もあり、前学年の学習内容が定着していない子どもも見られた。そこで2009年度から、家庭と連携した学習習慣定着に取り組んでいる。可児正充校長は、このねらいを次のように話す。

「授業で学んだ内容を身に付ける

には、家庭での学習が鍵を握ります。教師の目が届きにくい家庭で子どもが学びに向かうには、保護者の協力が不可欠だと考えています」

中津川市教育委員会も「学力アッププログラム」として生活・学習習慣づくりを力を入れている。11年度には、市内の10の幼稚園、23の保育園、19の小学校、12の中学校に通う全ての子どもと保護者に、生活・学習習慣づくりの仕方を示したシートを配布した。ただし、取り組みの主体はあくまでも学校だと教育研修所指導主事の大脇雄一先生は強調する。

子どもの生活を把握し 学習習慣の定着に生かす

「中津川市として生活習慣・学習習慣づくりを重視し、保護者と連携して進めようと考えました。具体的な活動は、子どもの実態に応じて各校で工夫してほしいと思います」

家庭学習の定着には生活習慣の改善が不可欠として、同校は年3回、子どもの家庭での過ごし方を調査している。5月、12月、1月の第2週目に、家庭での学習時間と内容、読書の時間、テレビを見た時間、ゲー

Mをした時間の4項目を、毎日子どもが調査用紙に記入する。調査では、毎回子ども自身に目標を立てさせ、主体性を持って自分の生活を振り返れるようにしている。調査への保護者の理解を得るため、毎年4月のPTA総会では、可児校長が家庭学習と生活習慣の関係を説明している。

教務主任の志津耕基先生は、調査のねらいを次のように話す。

「家庭にはテレビやゲームなどがあり、これらへの過度な傾倒は学習を阻害する要因となります。教師がただ『勉強しなさい』と伝えるだけ

図1 実際のデータ(4年生から抜粋)

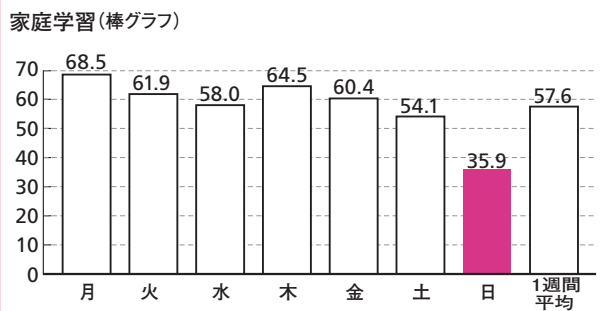
個人平均(月曜日～日曜日)				
氏名	家庭学習	読書	テレビ	ゲーム
A	81.9	0	15.7	4.3
B	42.1	17.7	61.4	10.9
C	79.3	0	81.4	30.0
D	15.7	0.7	47.9	37.1
E	20.0	7.4	30.0	2.9
F	47.9	10.7	17.1	0.7
G	34.9	0.7	45.7	0
H	47.9	11.4	90.0	12.9

課題がある項目は、セルの色が変わる。家庭学習は、学校が設けた目安の時間(1・2年生が20分、3・4年生が40分、5・6年生が60分)を下回った時、■になる。読書時間は、ゼロの場合が■、5分未満が■になる。テレビの時間は、90分以上が■、60分以上が■になる。ゲームの時間は、20分以上が■、10分以上が■になる。

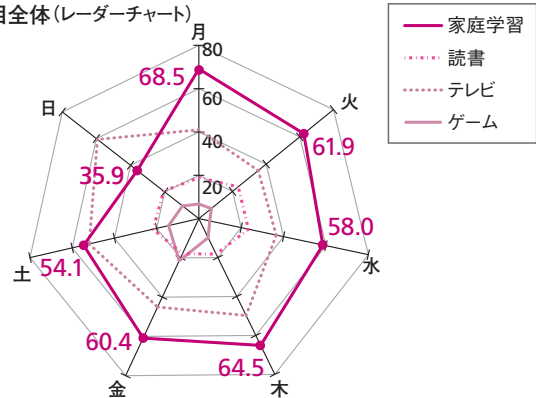
棒グラフは、家庭学習、読書、テレビ、ゲームの項目ごとに作られる。図中の日曜日は学年の目安を下回っているため、■で示されている。項目全てを表示したレーダーチャートは、家庭学習の時間がテレビやゲームの時間より多くなり、全体を包囲する形になることが理想だ

*表、グラフ、レーダーチャートいずれも、同校の資料を基に編集部で作成
 実物は■が赤、■が黄色で示される。また実物は、レーダーチャート上で全ての項目の時間が示されるが、誌面では家庭学習のみを示している

4年生全体の曜日ごとの平均時間



4項目全体(レーダーチャート)



岐阜県中津川市立付知南小学校

◎1984(昭和59)年、付知町立南小学校と東小学校を統合して開校。学校教育目標は「考える子 助け合う子 きたえる子」。教師の指導改善と並行して、子どもの家庭学習習慣化に取り組んでいる。

校長 可児正充先生
 児童数 176人
 学級数 8学級(うち特別支援学級2)
 所在地 〒508-0351
 岐阜県中津川市付知町10890
 TEL 0573-82-3073
 URL <http://www.city.nakatsugawa.gifu.jp/kyouiku/tsuminamishou/>



中津川市立付知南小学校校長

可児正充

Kani Masamichi

「子ども、保護者、教師それぞれが願いを持ち、実現しようとする学校をつくりたい」



中津川市立付知南小学校

志津耕基

Shizu Koki

教務主任。「夢を持ち、諦めずに努力し続ける子どもを育てたい」



中津川市教育委員会事務局
教育研修所指導主事

大脇雄一

Owaki Yuichi

「自ら積極的に学び取ろうとする意欲を育てたい」

でなく、子どもは帰宅してから何をしているのか、宿題にどれくらい時間をかけているのかなどを調べ、データを基に、家庭学習に向かう環境を整えていこうと考えました」

テレビとゲームの時間を減らして睡眠と食事の時間を確保し、家庭学習と読書を習慣化させることで、豊かな学校生活を目指す試みだ。

回収した調査用紙の内容は、子どもの実態を把握するために担当が表計算ソフトに入力する。各項目の1週間の合計時間、1日の平均時間などが全学年、学年別だけでなく、個人別にも自動で算出できるよう志津先生が作成した(図1)。

「全学年・学年別の平均データから、全体の傾向が分かります。ただ、

平均を見るばかりでは、例えばゲーム時間がどの子どもも多いのか、特定の子どもだけが多いのかは分かりません。教師がゲームをし過ぎないように全員に呼び掛けても、ゲームをほとんどしない子どもにはピンとこないでしょう。一人ひとりの生活習慣に合わせて必要な指導をするためには、個別データの活用が必要なのです」(志津先生)

担任は昼休みや放課後などに、生活習慣に課題がある子どもにも、調査結果を基に、「ゲームの時間をもう少し減らそう」などと改善点を具体的に示している。個別データは担任が印刷し、調査用紙と共に子どもへ返す。子どもは、調査用紙に自分のデータを貼って保管する(P.30図2)。

図2 子どもに返却された調査用紙

がんばってめあてを達成しよう

家庭学習時間などの目安

低学年(20分以上)
 中学年(40分以上)
 高学年(60分以上)
 中学生(学年11時間)

がんばるめあて
 ぎんぎょうを40万円より多くべんきょうする。
 テレビのひかんでなくする。

毎日読書の時間をつくらう
 テレビ最大90分まで!
 ゲームは約束を決めて!

一年前の1学期
 今年1学期
 多回の結果

学年 姓名 学校に通って行く日 10月21日(金)

かきかた
 ☆時間は、(分)でかきましよう。(例えば、1時間25分→85分)
 ☆どんな勉強をしたか、内容も書きましよう。(例えば、計算ドリル・漢字練習...)
 ☆数字の人は、お家の方といっしょにかきましよう。

	10/14(金)	10/15(土)	10/16(日)	10/17(月)	10/18(火)	10/19(水)	10/20(木)
勉強時間	45分	40分	45分	45分	40分	40分	60分
読書の時間	30分	30分	30分	30分	30分	30分	30分
テレビを見た時間	30分	30分	120分	60分	10分	15分	60分
ゲームをした時間	0分	0分	0分	0分	0分	0分	0分

自分のせいじかつをふりかえって
 テレビのひかんでなくする。
 がんばってめあてを達成しよう。

お家の方の感想
 がんばってめあてを達成した。
 がんばる。

*同校の資料から一部抜粋して掲載

調査用紙の構成も工夫している。子どもに書かせる「がんばるめあて」の左横に「家庭学習時間などの目安」を入れて、子どもが具体的な目標を立てやすくした。更に、子どもが自分の生活の変化を実感できるように、今回の調査結果を1年前の結果や前回の結果と並べて貼るようにした。「今回の結果を今までのものと比較できるため、子どもたちのやる気も増しているようです」(志津先生)

調査用紙には、家庭で生活を振り返れるように保護者の感想欄も設け

達成感を抱く子どもの姿が保護者の意識を変える

調査を始めてから、家庭学習や読

年だよりも発行。学年別平均データを紹介します。子どもの変化をこまめに伝えたり、「子どもが読書に興味を抱く第一歩になるので、家庭での読み聞かせをしてみたいかがでしょうか」などの提案をし、子どもの生活習慣について保護者にも一緒に考えてもらえるよう促している。

書の時間が増え、テレビやゲームの時間が減った子どもが目立つようになった。更に、どの学年の調査用紙にも、「前回より長く家で勉強できてうれしい」というコメントが増えている。

「毎回の調査では、自分で決めた目標を達成しようと頑張る子どもが増え、生活習慣に対する意識の高まりを感じます。努力する喜びを得ているのだと思います」(志津先生)

保護者の感想からも、調査を好意的に受け入れることが分かる。「子どもが勉強しやすい環境をつくれるよう、私もテレビを見るのを控えようと思います」など、子どもに協力しようとする声が多い。

調査を始めた時は調査用紙が期日までに集まらず、担任が何度も提出を呼び掛けていた。しかし今では、ほぼ全員分がそろうようになった。

「子どもの変化に気付いたからこそ、保護者の意識も変わったのだと思います。保護者にとって、学校についての最大の情報源は子どもなのです。今後は、保護者が子どもの成長を目的の当たりとする機会を増やし、家庭とのつながりを更に深めていこうと思っています」(可児校長)

2~3月の進級・進学前に授業や保護者会で使える教材、冊子を無料でご提供します

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2010年度は、のべ約11,000校から約187万冊ものお申し込みをいただきました。

2011年度は、高学年の児童向けに、キャリア教育の授業に役立つ副教材や、1年間を振り返って次の学年への意欲を向上させる冊子などを無料でご提供いたします。また、保護者会でご利用いただける保護者の方向けの情報もご用意いたしました。ただ今、申し込み受付中です。詳しくは本誌同送のチラシをご覧ください(ご予約いただいていない学校にのみ同送しています)。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。

学校&家庭 学び応援プロジェクトホームページ <http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

未来に進むちからを育むプロジェクト。
ベネッセの学び応援

申し込み締め切り

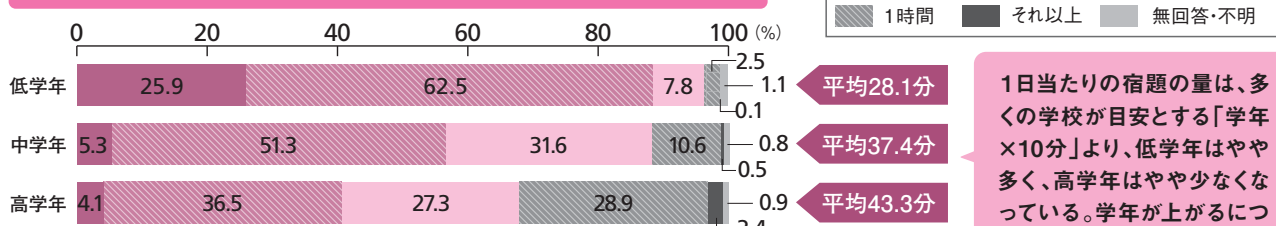
2012年

2/29(水)



低学年と高学年の宿題に掛かる時間差は15分程度。内容の多くは基礎の定着

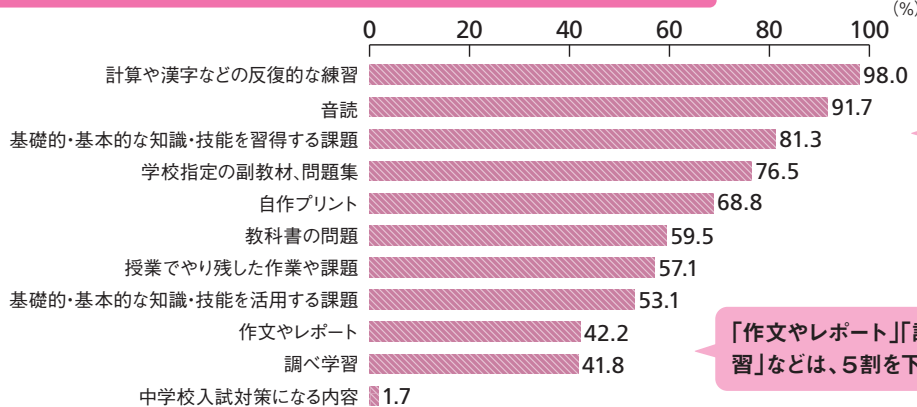
1日あたりの宿題の量(回答:学級担任をしている小学校教師)



注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ(2,688人の97.4%)に、「あなたが出す宿題は、平均的な児童にとってほしい1日何分くらいの量になりますか」と質問。平均時間は「15分」を15分、「30分」を30分、「45分」を45分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分に置き換えて、無回答・不明を除いて算出

1日当たりの宿題の量は、多くの学校が目安とする「学年×10分」より、低学年はやや多く、高学年はやや少なくなっている。学年が上がるにつれて、宿題以外の自主学習を推奨する割合が増えることが背景の一つと考えられる

宿題の内容(回答:学級担任をしている小学校教師)



注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ(2,688人の97.4%)に、宿題として出している内容を質問(複数回答)。数値は、「よく出す」+「たまに出す」の割合

宿題の内容は、基礎を定着させるためのものが多い

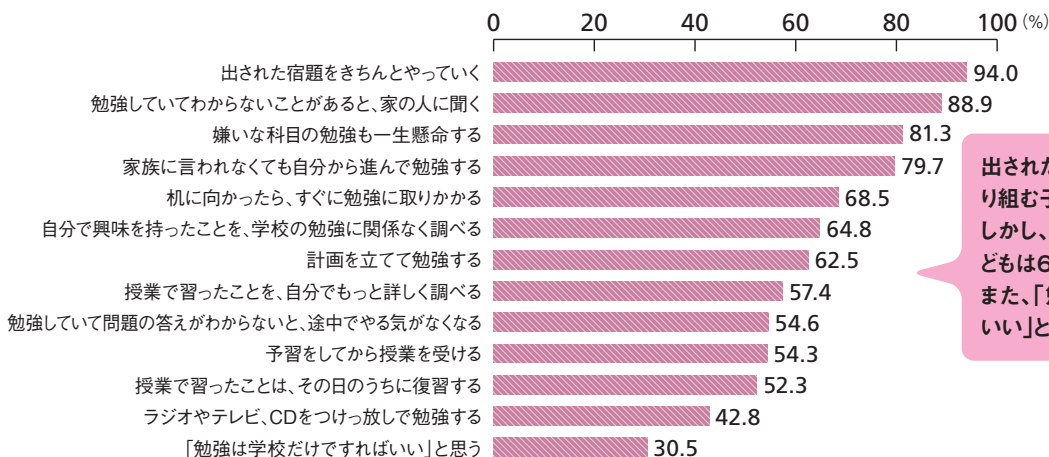
「作文やレポート」「調べ学習」などは、5割を下回る

出典: Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査報告書 小学校・中学校版」(2011)

調査時期は、2010年8～9月、調査対象は全国の公立小学校・中学校の校長および教員(うち小学校の教員は2,688人)、調査方法は郵送法による質問紙調査

8割以上の子どもが真面目に宿題や勉強に取り組むが、計画を立てる子どもは6割

家での学習の様子(回答:小学5年生)



注1) 数値は、「あてはまる」+「まああてはまる」の割合

出された宿題や勉強にきちんと取り組む子どもが多い。しかし、計画を立てて勉強する子どもは6割程度にとどまる。また、「勉強は学校だけですればいい」と思う子どもも3割程度いる

出典: Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査報告書・国内調査 小学生版」(2008)

調査時期は、2006年6～7月、調査対象は全国3地域[大都市(東京23区内)、地方都市(四国の県庁所在地)、郡部(東北地方)]の小学5年生2,726人、調査方法は学校通しの質問紙による自記式調査



上記の関連データはコチラ!
<http://benesse.jp/berd/>
*「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

2011 Vol.3 創刊30号記念号「未来をつくる日本の小学校」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)でご覧いただけます。

◎8校もの魅力ある学校の取り組みを、じっくり時間を掛けて読みました。社会の大きなうねりの中で、教育が翻弄されているような気がします。目の前の子どもと地域を見つめる中で、どのような子どもを育てていく必要があるのか、記事を資料に、教師全員が考える機会となりました。 [静岡県 / I小学校 / H・H]

◎どの学校の事例にも「どんな大人になってほしいか」「そのための小学校の役割」「未来に残したい力強さ」が共通して書かれており、各学校の特色を基にどのような学校づくりをしようとしているのかがよく分かりました。先生方の言葉がそのまま書かれており、思いがよく伝わってきました。 [愛知県 / K小学校 / S・S]

◎^{うのすま}釜石市立鶴住居小学校の記事を読み、大きな災害を乗り越えた先に「当たり前」の暮らしがあることを感じました。特に、「たった一言で」という詩の言葉の深さに感動しました。この詩を使わせてもらって、授業を創りたいと思います。 [栃木県 / S小学校 / O・H]

◎東日本大震災が起これ、学校・地域・家庭のあり方を改めて考える機会となりました。表紙は親子3代の写真。通常号と異なり、新鮮さを感じました。掲載された学校の思いは「子どもたちのために」という一点に集約されます。日本全国、学校の規模も大小異なり、どの学校も取り組みは違いますが、思いは共通です。今後たくさんの学校の特色ある取り組みを紹介してほしいと思います。 [鹿児島県 / M小学校 / N・M]

◎私も、日本人学校に教諭として赴任した経験があります。ともすれば、在外教育施設での教育活動に目が向きがちですが、今回のように外から日本の教育の有り様を見つめ直す視点は、自分の経験を再整理し、日本の教育を再認識できる機会となり、大変有意義でした。 [岡山県 / M小学校 / M・S]

◎日本女子大の吉崎静夫教授の記事では、小学校のあり方や授業づくりの工夫について、過去、現在、未来を見通して述べられ、「3つの基盤」の大切さを再確認できました。教師のプロデューサー的役割という視点は、新鮮に思えました。 [大阪府 / K小学校 / F・Y]

◎カラー写真の子どもたちの表情が良かったです。「いつまでも変わらない風景」の中でこそ、「新しい未来」がつけられるべきなのだと思います。各校の伝統の上に新しいものをつくっていくことがイノベーションだと感じます。表紙と相まって印象に残りました。 [山形県 / H小学校 / T・K]

◎とじ込みの「未来をつくる小学校の風景」では、偏りのない目で子どもたちの姿を捉えていると思いました。本校とは地域性や環境が全く違う都市部の学校の風景ですが、子どもたちの姿は同じだと思いました。また、「未来に残したい学校の一場面」にあった掃除の風景を見て、大事なものをしっかり守っていくことを忘れてはならないと改めて感じました。 [鹿児島県 / K小学校 / U・M]

お知らせ

文部科学省が**被災地の学校と提供者を結ぶ**マッチングサイトを開設しています

「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」<http://manabishien.mext.go.jp/>

編集後記

前号の「未来をつくる日本の小学校」に、多くの心温まるご感想をいただきありがとうございました。ご意見を拝読し、これまでの良さを基盤としながらも、同時に変革していく勇気を持つことの大切さを感じました。今回のテーマの「小中接続」も、実現は容易ではありません。しかし、ご紹介した学校のように、今日も2万校の小学校のどこかで、必ず「子どものために」実践の工夫がされています。そのような姿を記事に込め、先生方と想いを共有させていただけること——これが、私にとって何よりの喜びです。(青木)

VIEW21 小学版 2011 Vol.4

2012年2月10日発行 / 通巻第31号

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行人 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター
 印刷製本 (株)ビーヴィーコーポレーション
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 二宮良太、長谷川敦、山口慎治
 撮影協力 荒川潤、川上一生
 イラスト協力 浅沼リカ、幸剛

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部
 電話 **03-5320-1287**
 〒163-0411東京都新宿区西新宿2-1-1
 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2012